

---

# 学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD-黒い鵺鴉-

インフル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録  
H I G H S C H O O L  
O F  
T H E  
D E A D -  
黒い鵲鴿 -

【Z-17】

N  
7  
4  
7  
1  
U

【作者名】

インフル

【あらすじ】

さえない大学生が大学へ行く道中、乗っていた電車が脱線事故をおこす。不幸にも先頭車両に乗っていた彼は車両ごとつぶれる。そして死んだかと思つたら神と名乗る男の人に力を与えられ、転生する。

しかし転生した世界がなんとH Ó Í Óの世界だった。

そんなリアルバイオの世界を彼はどうやって変えて行くのか……

•

## No.04 (前書き)

鴉羽様と冴子先輩が好きすぎて書いた。  
反省はしてない。  
後悔もしてない。

## No. 04

それは約4時間ほど前のことだった、たぶん。

??? side

たいして頭もよくなく、むしろ悪い部類に入っていた高校時代の俺は某都内の早い稲の大学に当時付き合っていた女子と一緒にいたいがめに猛勉強をして受験した。

別に今時彼女と一緒にの大学に行きたいとの理由から同じところを受けたとしてもおかしいことでも何でもない。むしろ大多数はそうしたいはずだ。

だから、当時お世辞にも優秀とは言えなかった俺の勉強を非常に頭のいい彼女に見てもらった。

勉強を見てもらった俺は自分の努力もあってか、志望大にもしかしたら受かるかもというところまで来た。

彼女は優秀だから自分とは違って難なく受かるだろう。そう思っていた。

そして一次試験は二人とも難なくクリアし、センターに駒を進められた。

センターは厳しかったが、ギリギリでなんとか通れた。本当に1点や2点差の違いだった。

しかし、ここで彼女がセンターを落とした。

原因は英語科でのスペルの間違いと言う。ケアレスミスだった。

彼女は気丈にも来年があると言った。その時俺はどう言葉をかければいいのか分からず、ただ彼女を抱き締めた。静かに彼女が泣き止むまで。

その後俺は無事入学し、彼女も1年後には無事に入学してきた。

学期が違ったが、それでも俺たちの関係は変わらず、むしろ深くなり、卒業後には結婚さえ考えていた。そしてさらに1年が過ぎた。

今俺は大学に向かっている。これから講義があるからだ。

ちなみに彼女とは同棲しており、ナニも一応した。そして彼女は講義が午後なので今は一緒にいない。今は上野のキャンパスに向かって電車で乗っている。

??? side end

ああ、確かその後電車は脱線事故を起こし、運悪く先頭車輛に乗っていた俺は事故で車輛ごと潰れたんだった。

『やつと回想が終わったか？』

突然後ろから声が聞こえた。

「誰だ？」

『驚かないんだな』

そこには一人の男の人がいた。

「後から気配もなく声をかけられるのはなれてるからね」

『そうか。所で、今自分がどんな事態に陥っているのかを正しく認識できるか？』

「……電車事故で死亡し、今は天国か地獄に行くのかを待ってるんじゃないのか？」

『ま、死んでいることを自覚していれば上出来だな。そうだ君は死んだ』

「まさか、間違えて殺してしまったとか。そういうことは言わないだろうな？」

今ネットで流行ってる二次創作のように神が間違えて殺してしまっ

て、いろいろ便宜を図ってもらって、違う世界へ転生させる、なんていうことじゃないだろうな。それでは非常に困る。

『心配するな。確かに君は死んで、これから私が転生させようとしているが、決して誤って殺したからではない。君の死は必然だった。あの時が君の寿命だ』

「ではなぜ、ここに？　そしてここはどこだ？」

さつきから気になったことを聞く。

『ここはどこでもない。そして何故君なのかはというと、それはたまたまだ』

「たまたま？」

『そうだ。実は世界創造には君たちがビッグバンと呼んでいる、プロセスが必要で、分かりやすく言うと、核爆弾が質量をエネルギーに変えるというのならビッグバンというのはエネルギーを質量に変えるということだ。そこでエネルギーを込め過ぎてしまっただけ、いささかまずいことになった』

「というと？」

ただの一般人である私に世界などビッグバンなどといわれてもスケールが大きすぎて理解が出来ない。

『まったく同じ世界が二つ生まれたのだ。世界というのは無数あり、それは一つ一つ違って同じものは無い。だがここでまったく同じ世界が二つ生まれたということだ。これは非常にまずいことで、一言

で言えば、すべての世界が滅びる。

しかし、そこに『イレギュラー』を投入すれば問題はなく、投入された方はやがて変化し、世界はまた違つてゆく』

「そのイレギュラーが私というのか？」

『そうだ。いくら神といえど、勝手に人の生死には介入できない。だから、死ぬことが決まっっていて、なおかつある程度成長した人間を転生者というイレギュラーとして、世界に投入するによって世界を変えてもらう』

「誰でも良かったというのか？　なら何故私を『だからたまたまだ』  
・・・そうか」

私の死は決まっていたのか。これはきついな、まだ神に殺された方が救われ、いや、どの道彼女を悲しませるか。

『大丈夫だ。たいしたことは出来ないが、出来る限り彼女が不幸にならないようにすると約束しよう、そして時間が無い。これから行く世界を変えてもらうための力をいくつか用意した。これらの中から選べ』

セキレイ：鵺鴎N o . 0 2 松

セキレイ：鵺鴎N o . 0 4 鴉羽

セキレイ：鵺鴎N o . 0 5 陸奥

セキレイ：鵺鴎N o . 0 8 結女



「……いや、確かにセキレイは好きだよ？ 高校時代の友人に進められて見てみたら思いのほか面白くていろいろとコミックとかアニメとかも見たけど、さすがにこれはどうなの？」

『どうした？ 早く選ばないか、時間が押している』

「いや、あの……これだけ？」

『そうだお前が一番好きな作品から好きなキャラを選んだ』

そりゃあ確かにこのどれも好きなキャラだけど、だからってこれはどうかと、あとその他の問題などもあるし、それにいくら好きでもキャラそのものになるのはさすがに……

『心配するな。お前が転生したことによって本来誰かの運命を狂わせることも無い、誰かをのつとめることも無い。そうでなければ転生の意味が無い。』

それにこの選択肢はキャラそのものになるのではなく、キャラの能力を元に君の無くした体を再構成するもので、君はそのままの君でキャラになることは君が望まない限り無い』

そういわれて、ならばと調べてしまうのは仕方ないと思う。

男なら誰しも一度は夢見たことがある特別な力を貰って勇者になるなどという状況がいまの自分にあるのだ、興奮するのは当然だと思う。

『さあ、早く選べ。君の彼女には君の死で悲しまないよう細工をしておくから』

「分かりました。彼女のことはお願いします」

そういつて私は五つある選択のうちの一つを選んだ。

『なるほど、これが。では時間もまじめに無くなってきた。さっさと送るぞ』

そういい、私に両手に向けて神とやらが手を光らせて、私の意識はどんどん薄れていった。薄れていった意識の中私はただ彼女が早く私のことを忘れて幸せになってくれることを祈った。

## No. 04 (後書き)

早い稲大学はオリジナル設定入り。

実は作中の彼女はH・O・T・Dの世界では冴子先輩にあたる人。

## 黒い鵲鴒（前書き）

ダイナミック原作壊し？  
むしろ原作レイプ？

・・・いえ、ただのクロスでした。

## 黒い鵲鴒

私は転生した。

何を言っているのかと、頭を疑うかもしれないがこれは本当のことだ。大学3期生だった私は大学へ行くために電車に乗っていたら、脱線事故が起こって、運悪く先頭車両に乗っていた私は車両ごとつぶれてしまった。

それで、死んでしまったと思っていたら、突然神とやらに力を与えるから世界を変えてくれと言われ、彼女のことが唯一の心配だった私は最初ためらっていたが、出来る限り不幸にはならないよう便宜を図ってくれると約束してくれたので、決心がついて、力を貰い転生させてもらった。

そして私の今生の名前は鴉羽夏男というらしい。

なぜらしいのかというと、それは今私は赤ん坊だからだ。

そう、また人生を一からやり直しである。

これを知ったときは少し落ち込んだ。とは言っても30分ほど前のことではあるが。

そして、私の名前から分かった人もいると思うが、私は『セキレイ：鵲鴒No.04 鴉羽』を選んだのだ。

他のシングルナンバーや第3期懲罰部隊の紅翼の能力もいいが、日本男児たるものやはり刀を使ってみたというのはある。むしろ私にはそれしかない。確かに松の『覗き』は魅力的ではあるが、刀には敵わなかった。

そして6年が経ち、今は6歳。

神はどうやらいろいろと便宜を図ってくれたようだ。

私の姓が鴉羽であるように、両親もまた鴉羽である。鴉羽家は京都にある戦国時代から続く、武家であり、直系の末裔は当時から脈々と受け継がれてきた剣術を必ず習う。そして直系の末裔は当代の家長に認められれば、鵲鴒と名乗り、鵲鴒と名乗った人は家長になるという慣例が無形文化財として現代に遺されている、帯刀許可も無条件で下りるらしい。そして何より古代のセキレイの末裔である。

何故このような手の込んだことをするのか疑問に思っていると、頭上から手紙が突然ひらひらと落ちてきて、そこには鴉羽の能力ということは当然羽化が出来るということで祝詞も羽化したら、使えると書いてあった。そして体の構造は人間よりもセキレイに近く、むしろほとんどセキレイらしい。そうすることで私のこの能力は先祖帰りということで一応の説明はつくとのこと。

そんな私は今京都にいる。

何をしているのかというと、今は『鵲鴒』の襲名をしに京都の本宅にある大広間に来ている。6歳での襲名は前代未聞の偉業とのこと。

ちなみに鴉羽家の人は私がセキレイだということを知らないし、そもそもセキレイの存在自体知らない。

どうやら、説明してる間に襲名は終盤を迎えたようだ。あとは歴代の家長に受け継がれる太刀が渡される。

そして、太刀が私の手に渡された。これで私は名実とともに鴉羽家の家長となり、名を鴉羽夏男改め鴉羽鵲鴿夏男となった。

実を言うと襲名する前、4歳のときから剣術の修行をしていた時のこと、そのときにちよつとした出会いがあった。

夏男 side

4歳になってすぐに始まった剣術の修行だが、私は神から貰った鴉羽様の能力なのか、初めて刀を握ったときはやけにしっくりと手ににじんだ。本来なら3キロほどもある鉄の塊はまだ4歳の私には重くてもてないはずなのに羽のように軽かったのは覚えている。

そしてその後も鴉羽様の能力により、刀の扱いは日に日にうまくなって行き、半年ほどもたてば、父を圧倒できるようになった。そんな私は周りから神童だの鬼才だのとちやほやされた。あまりいい気分では無いとだけは言える。

そして、ふと気付けば目もどんどん細くなっていて、なぜか両親共

々黒髪なのに私だけは白髪に近い銀髪で、肌の色も白い。ぶつちやけていうと、鴉羽様の容姿そのままである。鴉羽様をそのまま男にしたような見た目に私はなっていた。

5歳になった今日、私は父を相手に剣術の修行をしていた。もう今では片手間でも父に勝てる。怪我をまったくしないし、したとしてもすぐに塞がるし、真剣を使った修行での結構深い切り傷もいつの間にか治っていたりと、鴉羽様のチート性を再確認した。

今休憩中の私は突然父に呼ばれた。何かと思ったら、どうやら今日は父の知り合いが来るらしかったが、私はまったく聞いてない。だから、突然見知らぬオジサンが綺麗な女の子を連れてきたときに何事だと思って固まってしまった私は悪くはない。

「ほら、夏男。挨拶をしないか」

父である、鴉羽隼人が言ってきた。

「あ、はい。どうも、初めまして、鴉羽夏男です」

そしたらオジサンは自己紹介し、娘を紹介した。

「初めまして、毒島冴子です」

これが私と彼女の出会いだった。

その後で知ったことだが、毒島家は鴉羽の分家だとか。



冴子とは同じ年だったらしく、その後も冴子とは時々遊んだり、剣術修行をしたりして、今ではお互いを名前で呼び合う仲になっている。

襲名も終わり、今は冴子と一緒にいる。なぜいるのかというと、本家の襲名に分家の冴子は当然来なければならず、ここ京都の本宅に居る。ちなみに冴子とは許嫁であり、婚約済み。

そしてやはり私にはあった鵲鴿基幹が冴子と竹刀を打ち合うたびに、今はそんなに強くないが、しっかり反応して居るのがわかる。

なぜ竹刀を打ち合ったびなのかは最初私も疑問に思ったが、最近なんとなく鴉羽様の力に引っ張られているのでは、と思うようになった。

襲名が終わり、家長になった私はこれから冴子と一緒に床主市にある屋敷に向かう。

え？ 家長なのになぜ本宅にいないのか？

私はまだやっと小学生になったのですよ？ 家長としての仕事は当然やらせてもらえない。

襲名はしたが、まだ実質的な家長は祖父にある。

ならなぜ今襲名するかは、それはただジジイと手合わせをしたら余

裕で勝ってしまったからだ。だからこそ6歳何て言う年で形式上家長なんてものになってしまった。

権力移譲は成人のときに行われるらしいが、形式上とは言え家長だから公式の場には一応出なければいけないらしく面倒くさい。こうなると分かれば興味本位でジジイとはやらなければよかった。

そして私と冴子は無事にこれからを過ごす床主市の屋敷に到着した。

## 黒い鵲鴒（後書き）

とりま原作が始まった時に、鴉羽本宅にいた人は全員無事設定。

そして鵲鴒就任は実は・・・

## 羽化とまさか出会い（？）（前書き）

セキレイのネタバレが多分に含まれております。  
そして都市生存フラグ。

## 羽化とまさか出会い（？）

時は流れて今私にとっての二度目の高校1年生。最近鴉羽様に似てきたことがもつぱらの悩み。

そして髪も冴子が切らせてくれなくて、今は腰あたりまで伸びた銀髪をうなじあたりで一つにくくってる。まんま鴉羽様だ。さらに、本宅に何故か懲罰部隊の服があった。鵲鴉紋もちゃんといっていた。とりあえず貰っておいたけど。

で、ためしに懲罰部隊の服を着てみたらまんま鴉羽様で、それを冴子に見られてしまった。という小3のときの話。

それから髪を切らせてくれなくなった。曰く、髪が長いほうが似合うのだそう。そりゃあ鴉羽様の容姿だから長髪は似合うだろうけどさ。

あ、そうそう。これは言っておかなければ。私、羽化しました。葦牙は当然冴子です。

事の発端は中2の時。

剣道部に入っていた冴子は剣道部の用事があって私だけが先に帰りました。そして剣道部の用事が終わって帰ってきてくる途中で強姦魔に会い、その時に持ち合わせていた木刀で強姦魔の肩甲骨と大腿骨を折りました。

警察に伴われて家に帰ってきた冴子はひどく怯えていて、何かを恐れているようで、見ていて非常に痛々しかったというのだけは覚えています。

最初は強姦魔に襲われたことに恐れているのだと思ったが、すぐにそんなことで悩むような人ではないと思い出し、問い詰めたところ、ひどく怯えていた表情で心のうちを語ってくれた。この時に何故か鵺鴒基幹が急に反応した。今までに無かった強い反応だが、それに耐え、痛々しい冴子をやさしく抱きしめて、自分のことを説明した。

鴉羽は太古のセキレイの末裔であること。

自分はその先祖がえりで、人ではなく、セキレイであること。

自分は羽化することにより祝詞が使える、人には想像もつかない力を振るえること。

自分には葦牙という存在が必要不可欠のこと。

そして何よりも太古のセキレイの争いのこと。

それらを全て冴子に話した。

いくら鴉羽で、婚約者だからといっても、全てを言ってしまうば恐れられて拒絶されてしまうかもしれないと思うと、正直怖かった。だが、そんなことも冴子の姿を見れば全て吹き飛び、気付いたら逆に冴子に抱きしめられ、幼子のようにあやされていた。

「ありがとう夏男。こんな私でも受け入れてくれて、認めてくれた。私はお前に救われた。本当にありがとう。たとえ、夏男がどんなん

であろうとも、人ではなかつとも、こんな私を認めてくれた夏男のそばを離れることは無い」

そついい私と冴子は唇を合わせた。

こつして私は羽化した。

そついえば、羽化した直後のことだが、第19代目鵲鴒として京都の本宅に帰つたときに偶然本宅の蔵で奇魂くしみたま、いわゆる神器を見つけた。しかも8つ。

そしてここに8つあるということは原作セキレイとは違つて、嵩天からは無事8隻の船が降りて、8人の女神と856体のセキレイが奇魂をめぐつて互いに滅ぼしあつたということで、鴉羽様とその葦牙が最後まで生き残つて、その末裔が私ということになる。

神器が8つあるということは他のセキレイは鴉羽様もしくはその葦牙によつて機能停止されていると考えていいと思う。おそらく鴉羽以外でセキレイの末裔はいないだらうということも。

それらのことも冴子に伝えたが、そつかの一言で終わらせられた。

羽化後は冴子の剣を見たり、学校終わりに手合わせしたり、剣道の全国大会の応援に行つたりした。もつとも、全国大会の時は19代目鵲鴒であることがばれて一悶着があつたりした。

そして、中3のときに最も驚くべき事があつた。

川神市があつたのだ。

どうやら鴉羽の鵲鳩というのは意外と有名らしく、その鴉羽の鵲鳩を6歳のときに襲名した私は川神鉄心と並んで世界から恐れられているらしい。つい先日米国から大統領が秘密裏で来日して、真つ先に床主市にある私の屋敷に来て不戦条約を結んだ。さらに前々から九鬼財閥の事も実は私の耳に入っていて、鵲鳩襲名の時本宅のほうに銀髪で額に×マークがある着物を着たおばs・・・お姉さんと同じく銀髪で額に×マークがある異様に凜とした雰囲気の高校生っぽい美人のお姉さんを見かけたが、どうやら幻覚じゃなかったらしい。

今年（私が中3の時）中1になった由紀江ちゃんが剣聖の父を伴って挨拶に来て、いたく気に入られたり、由紀江ちゃんと友達になったり、ちょうど京都の本宅にいた時に川神鉄心が来ていて手合わせしたり、一緒にきた川神百代に襲われたり、この世界は一体どうなっているのか。ちなみに由紀江ちゃんや百代と一緒にいた時の私の傍にいた冴子はすごく怖かった。

そして今私は藤美学園の入学式に出席するために、第1体育館にいるが、私の後ろに座っている冴子が非常に怖い、本来なら冴子程度の殺気は全然平気なのに、何故か今は全身から冷や汗が吹き出る。おそらく問題は私の左隣にいるこいつだろう。

川神百代が私の左腕に抱きついて  
いる。

何故ここに川神百代がいるのか理解に苦しむ、というよりも理解したくない。そして、校長の話し長い。あ、誰かが貧血で運ばれた。

いったい校長の話はいつ終わるのやら。早くこの苦行から開放されたい。そして、先からなにか冴子以外の視線を感じる。



視線の元を探ってみたら、まるで黒光りするゴク・・・例のアレの  
触角みたいなアホ毛を二本伸ばしてる女子生徒と目が合った。と思  
ったら目をそらされた。

ん？突然後ろからの殺気がやんだようだ。なんだろうと思って後ろ  
を振り向いてみたら・・・・・・・・

そこには般若が居た。

その日帰ったら冴子にこってりO H A N A S H I I されたのは  
言うまでもなかった。

そういえば、クラスでの自己紹介の時に候<sup>そうつ</sup>なんて語尾のついたやつ  
がいたな。名前はなんだったか・・・

## 羽化とまさか出会い(?) (後書き)

川神市登場。

鉄心のジジイの登場により一気にカオスになる予感。そして何気にフラグを立ててみた。

今後はマジ恋の人たちと絡ませていく予定。

鴉羽様と川神鉄心を戦わせて見ても鴉羽様が勝つところしか想像できないのって俺だけ？

むしろ鴉羽様に勝てる人っているの？

ああ、ゆかり……般nyじゃなくて美哉お姉さんがいましたね。でも、アレは人じゃないし、セキレイでもないからなあ……

## 葦牙の思い（前書き）

冴子視点で行ってみました。

微妙にヤン？

だがそれがイイイ！！！！

## 葦牙の思い

まったく、夏男はあんなに鼻の下を伸ばして、そんなに胸がいいのか？ そうなのか？ 私の胸では満足できないというのか？

そもそも最初の出会いは5歳の時に父と供に京都にある本家の本宅に行ったのが始まりだった。初めて会った印象はよく分らないだった。

当時から目が細く、異様に落ち着いた雰囲気を発していた夏男は最初は父と私を見て唖然としていて、隼人氏に挨拶をするよう注意されて、正気に戻ったようで、挨拶をしてきた。挨拶の後の微笑みを見て不覚にもときめいてしまった。その後も度々本宅に行き、夏男と供に剣術の修行をしたりした。

夏男は強かった。私は最初神童やら鬼才やらと呼ばれていても、所詮は温室育ちの坊ちゃんだと思っていた。私はまだ子供だから体力の関係でたまに負けたりしたが、純粋に力量での負けは父にさえ一度も無かった。だから私は夏男に勝てると思っていた。だが、そんなことは無かった。まったく歯が立たず、むしろ私は完膚無きに叩きのめされて、初めて純粋な力量差で負けた。そしてやっと神童という言葉の意味と、そしてその重みが分かった。

悔しかった。遥高みにいる彼に追いつきたく、軽くあしらわれた自分を認めてもらいたく、毎日血反吐を吐く修行をしたが、夏男に勝つところか日に日に遠く感じた。素振りをするたびに、新しい形を

覚えるたびに。

そんなあるとき、知り合って3ヶ月ほどたって、私のプライドがズタズタになり、刀を手放そうかと本気で考え始めていたとき、私は夏男に呼び出された。

道場に行った私はそのまま夏男に手を引かれて本宅の裏にある山の登山路に入った。最初は何をするのかと思ったが、歩いていくうちにどうでも良くなり、気付いたら山の中腹辺りにある開いた場所に私と夏男はいた。

山から本宅だけでなく、京都の町を一望でき、ここから見下ろした古都は綺麗だった。

「お前の剣は美しい」

前で夕日を見ながら、顔をこっちに向けずに私に突然語りかけてきた。私はどうすればいいか分からずに黙ったままだった。

「だがおいしい、

幼く、無垢であり、水を吸う真綿のごとく成長するその剣は果てしない可能性を秘め、たまらなく美しいが、折れかけている。

どこまでも美しく、どこまでもおいしい。

その剣、私に預けないか？」

振り返ってこっちを見る細い目は開かれていた。

未熟ではあるが、私も武人だ。目を見ただけで、相手の思っていることがある程度分かるぐらいの腕は一応持ち合わせてはいる。私に向けられたその瞳には何か焦っているような雰囲気があった。

私は驚いた。神童とも呼ばれた彼が私程度に見破られるほど焦ることなんてあるのだろうか？

原因は分かって居る。私だ。

私が、挫折し、刀を手放そうとしているのを見抜いているのだろう。なぜ、そこまで懸命に何かを訴えるのかは分からないが、その瞳に私は魅入ってしまった。美しかった。夕日色に染まる白い肌と強い意志を感じる灰色の瞳。今思えばこの時から私は夏男に惚れていたのかもしれない。この人と一緒にいたい。不思議とまた刀を握りたいと私は確かにそう思った。

それから夏男が私の剣を見てくれるようになった。見てくれるようになってから私は感じた。夏男は神童なんて生易しいものじゃない。底がまったく見えないのだ。夏男に剣を見てもらって、私の腕は急激に伸びはしたが、私が伸びた分夏男もまた同じように伸びていると感じられる。まるで、霞を掴むようだ。そこにいて、見えていても、触る事はできない。でも私は不思議と不安を感じるということは無かった。むしろ安心していた。

夏男と一緒に居る限り、今よりも私はもつとはるか高みにたどり着けると確信している。今は無理でもいずれは夏男に肩を並べてみせると、私は誓った。

そして夏男は鵲鴿を襲名して、第19代目鵲鴿となった。

これで私と夏男は離れ離れになるのかと思ったが、それは無かった。いつの間にか私は夏男と婚約していたのだ。これを聞いたとき私は大いに喜んだ。そして鵲鴿とはいえ、まだ小学生の夏男は家長とし

ての執務が出来ないので私と一緒にこの床主市に来た。

夏男と過ごしていくうちに夏男の存在が私の中で少しずつ大きくなっていくを感じた。小学校で同じクラスになり、同じ中学に行き、またクラスも同じになった。その頃になると私の剣の腕もかなり上がっていて、高校生所か有段者にさえ負けない自信があった。

私は当然剣道部に入ったが、夏男は入らなかった。何故かと聞くと、鶴鵠が剣道をやるのは結構まずいとの事。供に剣道部に入れなかったのは悲しかったが、その代わりに私は大会などでは応援に来るよう脅迫もとい約束を取り付けた。

私と夏男との関係が大きく変わったのはこのあたりだろう。

中2の頃に私は全国大会へ出場した。そして大会予選のときに次の試合の確認で帰りが遅くなった私は一人で帰っていたら、強姦魔にあい、私は正当防衛を笠に強姦魔を叩きのめした。

楽しかった。楽しくて仕方が無かった。圧倒的優位に立っている私は他人をいたぶるのがものすごく楽しく感じられた。

その後警察に家まで送ってもらった。だが、もしもこのことが夏男にばれると思うとたんに夏男に嫌われてしまうのではないかと怖くなった。もしそうなってしまったら私はおそらく壊れてしまうだろう。あれはああ見えてかなり鋭い、だからもうすでに分かっていたのではないかと思うと夏男の顔が見れなかった。

やはり私は夏男に道場につれてこられた。何があったと私は問い詰められた。嫌われてしまうのが怖くて、離れていってしまうのが怖くて、話したく無い。夏男に知られたくない。なのに勝手に口は動

き、気付いたら夏男に抱きしめられていた。

そして夏男は私に自分がセキレイであることを語った。その気になれば山を吹っ飛ばすことくらい造作も無いといい自分のがよほど化け物だと、ひどく弱々しい声とともに何かを恐れてる声で教えてくれた。

だからお前は化け物なんかじゃない。私が保障する。たとえ誰もかもがお前を化け物だといつても私だけはお前が化け物じゃないと言い張ってやる。たとえお前の本質が何であろうと受け入れてやる。私はお前が好きだ、毒島冴子ではなく、冴子という名の一人の女性として好きだ、だからお前が何であろうと私が認めてやる。

そういわれてやっと分かった。彼も恐れていたのだ、自分が人ではないことに、そして今私を安心させるために私に拒絶されてしまうかも知れないのに、それを私に語ってくれたりしている。私のことを非常に大切にしてくれていることが分かった。そう思うとどうしても夏男が愛おしくてそして、胸がひどく痛んだ。

だから私は夏男を逆に抱きしめて、私の心のうちを告げ、これ以上夏男を喋らせないよう、その唇を奪った。

夏男は羽化し、私は夏男の葦牙となり、そして夏男は私のセキレイとなった。それから私は夏男と確かな『繋がり』を感じることが出来るようになった。

その後私の脳裏に何故か『濡れるッ！』のフレーズが浮かび、とたんに何かがプツンと切れた。気が付いたら私達はまるで獣のようにお互いを求め合ったいた。もちろん私の寝室でだ。



私の胸に抱かれた夏男の寝顔を見ると凄まじい充実感が沸き起こり、胸がいつぱいになった。

翌日、私達は何故かこのことを知っていた父に当然『制裁』を下した。

夏男と一緒に本宅に行ったときに神器なんてものを見つけた。その時は何故夏男がそこまで青ざめるのか分からず、神器とはどういうものなのかを説明してもらった時は自分の耳を疑った。何故ならこの8つの神器があるだけで、全セキレイを機能停止させることができ、さらにセキレイの血をひく人間全員を殺すことも出来るなんてことは俄かに信じられることではないが、夏男を見ただけで、それは決して出鱈目でもなんても無いと分かった。

神器が8つそろつてるといふ事はおそらく一回使用されて、今では鴉羽以外にセキレイの末裔は残っていないだろうともいわれたが、それでも安心出来ずに今私達二人で4つずつの神器を持っている。

そして中学3年になったある日、京都某所に用事があった夏男と一緒に本宅に来ていたら、そこには川神鉄心なるジジイがいた。

そのジジイは夏男と手合わせをしたが、夏男と同等に渡り合う人間をはじめてみた。夏男が両手で竹刀を握ったのを見たのはそれがはじめてであった。今まで片手で竹刀を握り、そしてそれで私や父さんや先代鵲鴿を圧倒していたのだ。私はまだまだだと嫌というほど見せ付けられた。結局夏男が勝った。やはり本気を出してなかったらしい。その戦いを見た川神鉄心と一緒にいつてきた川神百代とかいう女が夏男に襲い掛かり、夏男にあしらわれていた。

ここまではいい、だがその後に川神百代が夏男を気に入ったらしく、

お前を私の舎弟にしてやるなんて夏男にのたまりやがった。当然夏男は断ったが、それでもしつこく夏男に迫る川神百代を見ていると、不思議と心から黒い何かが湧き出てきた。

その後も剣聖とともに黛由紀江とかいう女まで来て、夏男に手合わせしてはあしらわれたが、ちゃっかり夏男と友達になっていて、楽しく話しているのを見てるとやはり心から黒い何かが湧き出てくる。

さらには先日、秘密裏に来日した米大統領のブッシュ氏は床主市の屋敷に来て夏男と個人で不戦条約を結んだらしい。なんでもあの川神鉄心以来のことだとか。

そして今は藤美学園の入学式に出席するために第1体育館にいる。同じクラスなのはいい。かれこれ9年同じだからむしろクラスが違うのは困る。

だが、なぜここに川神百代もいる。しかも夏男の左腕に抱きだして？ 夏男も夏男で鼻の下を伸ばしてデレデレしおって。そんなに胸はいいのか？ あの胸がそこまでいいのか？ 私というものがあらながらあのような乳にうつつを抜かすとは。

……ウフフ、ウフフフフフ、どうやらこれはO H A N A S  
H I E R A S U R H I T S Y O U G A R I S O U D A .

## 葦牙の思い（後書き）

我らが主人公の夏男君が冴子先輩に惹かれていた頃、  
冴子先輩もしっかり夏男君に惹かれていました。

実は冴子先輩が刀を手放そうとしたとき、

あの時はもうほぼすでに刀を手放す決心がついていたのです。

それを我らが主人公は離れていく冴子を必死に引きとめようとして  
います。

そして必死すぎて、鵜鴯基幹が反応していることにも気付きません。  
強姦事件の時のレベルの強さでした。

その甲斐あって、冴子先輩は立ち直れました。

ダイレクトに心のうちが太古のセキレイの遺伝子を通じて冴子先輩  
に流れているのだから当然といえば当然ですかね？

ちなみに、最後の冴子先輩の嗤いですが、背後に般若が見えています。  
す。

ええ、あの般若です。

ブルッ！？（お、悪寒が・・・）

まさかの開始直前に気付く重要事項 これは何かのフラグでしょうか？（前書き

実はスクデッドの世界だとは気づいてない我らが主人公の夏男君です。

アニメを2、3話見ただけと言うwww

まあ鴉羽様の力だけでごり押し出来ますし、百代に鉄心とかもいるから敗けはないですねwww

まさかの開始直前に気付く重要事項 これは何かのフラグでしょうか？

ぴかぴかの高校3年生になりました。鴉羽夏男です。いや、ぴかぴかは二年前か。

この2年でいろいろありました。ええ、いろいろありました。

主に宮本麗との出会いとか、川神百代のあしらいとか、冴子のOHANA SHIとか……

ああ、そうそう入学した後にわかったことだが、あの語尾候ゴウの人はやっぱあの人でした。

そして、最初の自己紹介のときに宮本さんの番になってやっと私は彼女と同じクラスだと気付きました。ええ、どこかで聞いたことがある『平たい野原の綾さん』の声が聞こえて振り向いたときにやっ

その時は結構本気で『呂布が居る！？』と思ったことがあったりなかったり……

二年に上がって冴子は剣道部主将として全国大会へ出場し、候の人モやはり弓道部主将になってました。ついでに宮本さんは槍術部で、百代は変わらず一匹狼。ちなみに弓道部主将とはお友達です。ちなみにこれは私が冴子を見に剣道場へ行ったときの話ですけど、行くたびに人がやばいくらい集まってきます。何故かと思って聞いてみ

たところ、どうやら鴉羽の鵒鵒を6歳で襲名した私は武道界では生きた伝説になっているようです。

そういえば、屋敷には時々柔道やら合気道やら何処かの流派の師範代が道場破りに来ていたりしますが、そのさいに見せた歩法がいつの間にか各格闘技に取り込まれて主流になっていたりしていましたね。

それと実は入学してからずっと感じている違和感なんですけど、2年に上がって何なのか分かりました。

宮本さん伝いで、小室孝氏、高木沙耶氏らと知り合い、ついでにその時に平野コータ氏とも知り合った。

ここまで来てさすがの私でも気付きましたよ？H / O / T / Dの世界だと。冗談じゃないです。私この作品はアニメを2 / 3話みただけですよ？原作なんて知りません。今までの違和感がぬぐえたかと思ったらまさかの死亡フラグですよ。しかも飛びつきり大きいやつよく考えてみてほしい。原作開始前1年にやっと原作に気付く。あの神今度あったらミンチですね。

もつとも私はく奴ら>程度に噛まれても歯型さえ付くことはないのですが、冴子達のこともあるから油断は出来ません。

まあ、とりあえず京都にある本宅に定時連絡をするように通達したし、ついでに冴子、百代、候n…面倒だから弓子でいいや、にそれぞれ刀、手甲、矢を用意した。それと懲罰b…戦闘服でいいや（鵒鵒紋入り）も人数分用意させた。

今更思ったことですが、戦闘服（鵒鵒紋入り）って実はレディース

なんですよ。ええ、はい。いわゆる私にとっては女装になるのですが、誰も何も言いません。むしろ休日するときなどは冴子に着させられます。まんま鴉羽様の容姿なので似合っては居ます。私に胸はありませんが。そして悔しいですが、実は私もこの姿を気に入っていたりします。決して女装趣味などではありませんのであしからず。

閑話休題。

今私の目の前には何故か由紀江ちゃんがあります。

どうやら剣聖との話し合いの結果藤美学園に入学することにしたそうです。なぜかと聞いたら私がいるからだそうです。出来れば川神学園に行つて欲しかった。そこなら原作が開始したら鉄心のジジイがどうにかしてくれるだろうから。

でもまあ、来てしまったからには責任を持って剣聖の下へお返ししますよ？友達ですし。ああ、そういえば由紀江ちゃんの戦闘服（鵲鳩紋入り）も用意しないと。

そして冴子が怖い、ついでに百代と弓子も何故か怖いが、由紀江ちゃんも落ち込んでいました。松風と何か相談してるらしいが、よく聞こえなかった。

あ、そうだ。これも言うておかなければ。

成績が良かった宮本が留年しました。十中八九紫藤だろうけど、一応宮本に聞いてみました。私と宮本はそういう悩みを言えるほどには友達ですよ？

案の定紫藤でした。とりあえず宮本の愚痴に付き合つた後教室に返

しました。そして、宮本が去った後の屋上で私は本宅にこの事を調べるよう通達しました。そしたら出てくるわ出てくるわで、すごいですね、紫藤一家は。

まずは、汚職に脱税、賄賂に不正献金、暴力団との繋がりに麻薬取引、極めつけは親族の犯罪のもみ消しですか。とりあえずそれらを今回の紫藤の公文書改竄と一緒に匿名で宮本パパにリークしました。

当然紫藤議員は逮捕。

そして紫藤は今回のこと以外でも強姦未遂とかしていたようですね。逮捕されてました。ちょうど紫藤の授業のときに私の目の前で。何かの間違いだと叫んでいて、見苦しかったですね。もっとも強姦云々は私のでっち上げですが。

その後宮本パパに極秘で感謝状を床主の屋敷で手渡されました。

驚いたね。いつ気付いたのだと。そしたら、これほどの情報を集められる民間人でいて、このことを知りえるのは同じクラスだった私だけらしいので、まさきに名前が出てきたとの事。まあ私も紫藤は嫌いなので、別にいいかと思いましたが。実はあの人いつも牙子を舐めまわすように見るので、卒業まではどうにかしたいと思ってましたし、今回のことでむしろスッキリしました。いきなり原作ブレイクしてしまったけど、知ったことではないので放置。

そして何処から漏れたのか紫藤が逮捕された翌日に宮本に感謝された。当然とぼけたけど、あの目は信じてない目ですね。

時は流れ、今私は本宅からの定時連絡を見てます。



ついに始まりました。原作です。

でも少しばかり早いです。まだ4時限目が終わったばかりです。原作の5時限目途中に比べて1時間ほど早いけど、ここに来るまでにはまだそれくらい時間が掛かるって事ですかね？本宅は京都にあるし。でも、そう考えると伝染がずいぶんと早いですね。

まあ、とりあえず冴子と百代と弓子と由紀江ちゃんに戦闘服（鵲鳩紋入り）に着替えてもらおう。そして武器も渡さないで。

何気に5人になってますね。これ以上増えるとなると、原作組も入れて少々面倒なことになりますね。今更増えることも無いと思いますが。

さて、どうしようか、おとなしく原作に参加する気は無いけど、かといって原作陣を見捨てるのもアレだし、一応皆友人だから連れて行きますか。でも、本宅と川神市どちらから行けばいいのでしょうか？

まさかの開始直前に気付く重要事項 これは何かのフラグでしょうか？（後書き

なんか外道っぽくなった…（・・・）

ここでまさかの番外編！？ もし夏男君がマジ恋の世界に転生したら！（前書き

ヒロインは揚羽様です。

独自解釈やオリ設定が多数含まれております。

そういうのがダメな人は閲覧にご注意ください。

「ここでまさかの番外編！？　もし夏男君がマジ恋の世界に転生したら！

## 遺伝子生体研究所

薄暗い何処かの研究所の中、いくつもの緑色に満たされた培養槽があり、中にはコードにつながれた『試験体』が入っていた。

いくつもある培養槽のうち04と赤い文字で書かれている培養槽の周りにある計測器で幾人の白衣を着た男女が集まり、キーボードで何かを打ち込んでいた。

「これで、これで我々も財閥に認められる」

研究員の中の一人が小声で呟いた。その声はひどく小さく、そしてひどく歪んでいた。

他の人も全員何処か歪み狂っている雰囲気が出ていて、この研究室全体が歪んだ空気に包まれている。

薄暗い研究室は再びキーボードをたたく音だけに満たされる。

しばらくして研究員達の前にある04番の培養槽は空気の抜けた音を発した。それと同時に培養槽の中の培養液が抜けて行き、中に入っていた『試験体』につながれていたコードも外れた。

培養槽の中に入っていた試験体はゆっくりと目を開き、灰色の瞳を

あらわにした。

その灰色の瞳に魅入られた研究員達の表情は皆興奮しており、歓喜し、異常出力を示し、警告のアラートを鳴らす計測器から意識を完全に離していた。

「はは、ははは。これでついに」

研究員は最後までいえなかった。『試験体』に頭をつぶされたからだ。

『試験体』は頭部を掴み、アイアンクローの状態で手に力を入れて研究員の頭をつぶした。その殺戮を見た研究員達は悦び、口々に歓喜の声を上げて逃げるところか『試験体』近づく人さえいた。

その後も『試験体』は他の研究員の頭部をつぶしていく。

「すごい、すごいわ。私達はこんな化け物を作り出したというの？  
学会に発表すれば間違いなく歴史」

恍惚とした表情でしゃべっていた女性の研究員を最後にこの研究室に『人間』は居なくなつた。

研究員の死体と血にまみれ、酷い鉄錆てつさびの臭いに染まつた研究室を『試験体』は他にも数個ある培養槽を見回したら、一機のコンソールに近づき、何かを打ち込み、そして、空気の抜けた音とともに他の培養槽からも培養液が抜けて中から『試験体』が出てきた。

培養液から出た『試験体』は男形が1体と女形が3体に合わせて最初に出た男形1体の合計5体。

突然、研究室と外を隔てる扉が開き、通路から一人の学生服を着た女と30数人の完全武装をした何処かの特殊部隊のような格好をした人たちが入ってきた。

4体の『試験体』は入ってきた人たちを気にする事も無く、全員最初に出てきた『試験体』を見ている。

最初に出てきた白に近い銀髪を研究員の血で赤に染めた細目の男形の『試験体』はいつの間にか持っていた太刀を鞘から抜き、見る人にとっては嫌悪感を与えるような、唇が裂けていると錯覚させる笑みを浮かべながら顔だけを背後に居る学生服を着た女に向け、言った。

「遺伝子複成試験体。シリアルナンバーS108 004 通称・  
鵲鴿NO.04 鴉羽」

??? side

今我はある噂により人体実験らしきことをしている研究所があると聞いてやってきた。

その研究所の中にはいろいろと驚くべきことがあった。

源義経やら武蔵坊弁慶やら那須与一など歴史上の偉人のクローンを

作っておつたらしいが、その研究所の最深部にセキレイとやらという『特殊能力を保持する強化生命体』がいるようだが、我にはさっぱり理解できん。

まあ、よい。たとえ特殊能力であろうと強化生命体であろうと、この我、九鬼揚羽と九鬼財閥が誇る特殊戦闘部隊のマンガース隊で蹴散らしてくれようぞ！フハハハハ！

??? side end

どうも、スクデッドの世界に転生させられました。鴉羽夏男です。

結果的に世界は変わりました。というよりも無理矢理変えました。

あれからの全てを以下から箇条書きにて説明。

### 原作との違い

- ・大統領や首相など、各先進国の国家元首が川神市に集い、原作と違って核弾頭は発射されていない。

- ・川神市へ向かっていた途中、本宅からの応援要請を受ける。急遽夏男だけが本宅へ向うも、着いた時はもうすでに全滅。

- ・<奴ら>になった本宅の人間を殲滅した後本宅を放棄。鴉羽家は壊滅。生き残りは夏男と分家の冴子のみ。

・ 本宅を放棄した夏男は至急懲罰部隊組、原作組と合流し、川神市へ向かう。

・ 途中紫藤を発見。即時に殺害。

・ 一同川神市へ無事到着。原作組は川神院に立てこもる。

・ 同日にて川神市を残し、世界中全ての都市は陥落。

・ 川神鉄心、川神院師範代以下門下生、鴉羽鵲鴿夏男、懲罰部隊組、ドイツ陸軍フランク・フリードリヒ中将及びドイツ陸軍第8特殊大隊、黛剣聖、武道四天王全員、九鬼一族及び九鬼家従者部隊、板垣一家、釈迦堂刑部ら実力者が集い、話し合いの結果<奴ら>への報復を開始。

・ 川神市周辺の<奴ら>を殲滅したのち、実力者を分け、関東、北陸、近畿、中国へ多方面戦線を張り、それらを奪還。その際、四国や北海道、九州へつながる橋やトンネルを破壊し、完全に日本列島本州への移動手段を絶つ。後にこれを人類は列島大戦と呼ぶ。

・ 原作開始より1年。日本列島本州より<奴ら>が完全に消滅した。

・ 四国や北海道、九州などの奪還も試みるも失敗。

・ その後も幾度にも渡る領土拡大作戦を行うも同様に失敗し、人類は安住の地を日本列島本州のみを遺すことになった。

・ 生き残った人は川神市を首都とし、列島本州を人類唯一の国家として、先の列島大戦で多大なる戦果を挙げた鴉羽鵲鴿夏男を象徴と



した立憲君主国、鵲鴿王国を成立させる。

と、だいたいこの様な感じになりました。

多大なる戦果なんて言えば綺麗に聞こえますが、実際はただ祝詞を使つて全力で暴れていただけですけどね。爽快でした。本気を出したのはあの時が初めてですね。ただ、最初にく奴ら>の殲滅が始まった時に祝詞で本気の居合いを放つたら山が消えたのを見た人達の啞然とした顔は今でも忘れられないです。

ちなみに、宮本は小室氏とくつつき、コータは高城後輩とくつつきました。私は冴子に懲罰部隊の人達とでした。ハーレムとかいいますが、国王とかに担ぎ上げられて周りから子を<sup>な</sup>生ずのも王たる者の義務です、だとかひたすら言われ続けたらどうでもよく思えてくるよ？

そして私が寿命で死んだ後、また神にいました。あの神です。当然ミンチにしました。

ミンチにした後もいろいろありまして、また転生することになりました。どちらかというトリップに近いかもですがね。ちなみにマジ恋の世界だそうです。

そして神にマジ恋の世界に送られたはずなのに、私の今居る場所はまったく知らない研究所のような場所です。目の前には研究者らしき白衣を着た男女が6人ほど居ます。

先からなにやらうるさい。殺すか。

ん？思考が鴉羽様に近くなっているようです。あの神は今度は調整

なしの状態で送ると言っていましたから、これが本来の鴉羽様の力な  
のでしょうけど、鴉羽様の殺人癖ってここから来てたんですね。

今私の鵲鴿基幹が尋常じゃない勢いで私に訴えてきます。こいつら  
を殺せと。

おそらく今の私の目は物凄く血走っているでしょう。なるほど、  
他人にこの目を見られなくなつたから細目になつたんですね鴉羽  
様。

スクデッドの世界でもこれに似たことはあつたが、戦闘時だけだか  
らなんとも無かつたのですが、マジ恋でこれはキツイですね。自分  
を抑えられそうにない。今にも飲み込まれそうです。

スクデッドでこれなら良かった、いえ、ダメですね。間違えて冴子  
とかを切つた日には狂つて世界中の人間を滅ぼしてから喉を掻つ切  
つて自殺する自信があるから、あの神はどの道ミンチですね。

揚羽 side

今我はマンガース隊と供にこの研究所の最下層にあるセキレイなる  
ものの居る所にきているが、この強烈な鉄錆てつさびの臭いはさすがの我で  
もキツイものがあるぞ。

我が九鬼財閥が誇る戦闘特殊部隊のマンガース隊の奴らもこの惨状  
に皆息を呑む。

中に居たのは男が二人に女が3人。

研究室内に居た男女の中の4人は先から我らがここに入ったのにも  
気にもせず、全身を血に染め、おそらく元々は白髪だっただろう長  
い髪も赤く血の色に染まつてる太刀を持った男を見続けていた。

その血に染まつた男は顔だけをこちらに振り向いてきた。

その顔に張り付いていたまるで口が裂けたかのように見える笑みを  
見た瞬間我は恐怖よりも先に興奮を覚えた。

強者だ。

間違いなく強者、しかもこの我をたやすく越えるほどの。

フハハハハ！これがセキレイか！！

まったく、本当に来てよかった。感謝するぞ、ヒュームよ。

「遺伝子複成生命体。シリアルナンバーS108-004 通称・  
鵲鴿No.04 鴉羽」

そう言った瞬間男の周りに居た4人の男女はマングース隊に攻撃を  
加え、男も手に持った太刀で我に切りかかってきた。

一番最初に動いたのは深い茶髪の女だった。そいつは右手を一振り  
しただけで、マングース隊が身に着けていた通信機などの電子機器  
が軒並み壊れた。

その次に動いたのは薄い紫髪と深い紫髪の女だ。薄い紫髪の女はマングース隊の装備として腰のホルスターにさしていた棍棒を奪い取り、奪い取った隊員の心臓をその棍棒で貫き、殺した。深い紫髪の女は人差し指を隊員の一人に向けたと思ったらカマイタチのようなもので隊員は切り裂かれて絶命した。

薄い茶髪の男は薄い紫髪の女と同様に隊員から棍棒を奪うとそれを地面に突き刺す。すると信じられないことに地面が隆起し、天井が崩れた。

最後に血に染まった男は手に持った太刀で我に切り結んできた。

信じられん重さだ。

ヒュームが無理やりつけてくれたこのなんとか合金の手甲のおかげで何とか防げたが、もしこれが無かったら今頃我は腕ごと真つ二つだろう。

どうやら我は藪をつついてとんでもない化物を出したようだ。

今回の事ばかりは本気でヒュームに感謝せねばな、最もたった一太刀を浴びただけでボロボロのこの手甲で生きて帰れるのやら……

揚羽 side end

九鬼揚羽はまだ知らない。これが後に全てを投げ捨てても供に歩む

ことを決める事になる彼との出会いであると

ここでまさかの番外編！？　もし夏男君がマジ恋の世界に転生したら！（後書き

鴉羽様なら本気を出せば山すら消せます！

そして、マジ恋転生の番外編です。

実はこれ、次作の草案で、近いうちにこれを編集して投稿します。

更新はこっちメインの時々あっちで行きたいと思います。

ちなみにマンガース隊はあのマンガース隊ですww某『神が座る島』  
で鴉羽様にへりを真っ二つに切られてるあのマンガース隊ですww

そして夏男君の戦闘力はよりインフレしていきます。

下手したら美哉でも勝てないほどかも？

## 終わりの始まりと力の使い方（前書き）

オリジナル設定あり。

今回はついに祝詞登場。

鴉羽様の祝詞はどこを探しても無かったのでそれらしく作りました。

効果は今分かってるところで身体能力強化と動体視力上昇です。

鴉羽様スペックの肉体でさらに身体能力強化と動体視力上昇とかま  
さに鬼に金棒www  
ただでさえチートなのにwww

## 終わりの始まりと力の使い方

原作が始まりました、鴉羽夏男です。

昼休みに皆を集めて今剣道場にいます。原作陣もいますよ？でもここに鞠川先生はいないんですよ、実は。教師に今く奴ら>のことを知られるわけにはいきませんし、知らせても信じてくれないでしょうから、鞠川先生は事が起こってからです。

原作陣には動きやすい服に着替えてもらいました。私、冴子、百代、弓子、由紀江ちゃんは懲罰部隊服ですが、宮本にだけは恋姫の呂布の服に似たつくりの服を渡しました。

ちなみに永さんはいません。どうやら私が紫藤を摘発したことがフラグになったようで、永さんは依然片思い中。

今私達は全員武装しています。

原作組みには小室氏は釘バット、宮本には大身槍、コータには80ポンドのハイパワーピストルボウを矢10セットの高城後輩にタブレットPCです。

私と由紀江ちゃんは常時帯刀していて、冴子には屋敷にあった村正の一本を渡しています。妖刀じゃないですよ？弓子には麦粒むぎつぶの矢を1ダース20セットを、そして百代には超硬合金製の爪がついた手甲を渡しました。百代は息を荒くしながら、ものすごくいい笑顔



でストレッチしてます。殺る気満々のようです。

あ、そうそう由紀江ちゃんが居合いを得意とすると聞きましたので、入学して挨拶に来た日から重点的に居合いの剣速をあげさせています。一ヶ月ちよつとだけしか時間がありませんでしたけど、今の由紀江ちゃんは居合いの剣圧だけでカマイタチを起こせて、それで鉄筋を切れる程度には腕は上がっています。

そして今は皆に＜奴ら＞のことを説明し終わって、これからどうするの話を話しあっています。

「なら、今すぐ知らせないと!」

小室氏の言。

「知らせてどうする?」

とりあえず私は頭に血が上っている小室氏を落ち着かせようとしてみる。

「決まってるだろ!一人でも非難させるように」どこに避難する?」  
……どこか安全な場所に」

人としての正義感はすばらしいとは思いますが、今この状況ではただ足を引っ張るだけです。

え?私ですか?大切な人達とかならまだしも、赤の他人を私は助ける気はまったくありませんよ?むしろ、大切な人たちのために平気で犠牲に出来ます。人でなしとか言われるかもしれませんが、知ったことじゃありませんね。私セキレイですし。

「無理よ、仮に鴉羽先輩の言っていた事が本当だったとして、安全な場所なんて何処にも無いわ。あつたとしても混乱した人があつまつて避難ところじゃなくなるから、今から行っても意味が無いわよ」

高城後輩が小室氏を宥めてくれた。

それにしても安全な場所ね。あるにはありますよ、京都の本宅とか、川神市とか、北陸・加賀あたりにある剣聖宅とか、板垣家とか、クリス嬢のいる場所とか、九鬼本邸とか……あれ、意外とある？

『全校生徒連絡します！！校内で暴力事件が発生中です！！生徒は先生の指示に従って非難してください！！繰り返します！！校内で暴力事件が発生中です！！生徒は先生の指示にしたがうガガ………ああ！？た、助けてくれッ！！やめてくれッ！！ひ、ひ、ひい、ひいひい、や、やめ……いた、痛い、助けてくれッ！！うああ、うああああ、ああああ、ああああ（ブツッ）』

放送室で起こったであろう『暴力事件』により学園は静まり返り、数瞬後、静寂をやぶったのは、学園全体から聞こえる悲鳴だった。

「……な、んだ……これは」

小室氏はいまだ現実が見えていないようです。それもそうですよね、こんな非現実的なこと、普通なら誰も信じられないだろう。しかし、悲しいことにこれは現実なのです。

さて、原作も始まったことですし、早いところ鞠川先生を保護しないと。非常時での医療従事者の保護というのは大変重要ですから。いろいろと騒いで若干原作より遅れている気もするし。

「待て夏男。どこに行こうとしている？」

剣道場を出ようとしたら、冴子に手首を掴まれて、どこに行くのかときかれた。心配をしてくれているのですね、胸にジーンと来るものがあります。でも、それは私には無用ですよ？ 知性があるならともかく『脳のリミッターが外れて音に反応するだけのただの死体』程度に私を傷つけることなんて出来ません。それでも油断はしませんが。

「医療従事者の保護だ」

「一人では危険だ。私も行こう」

冴子も一緒に来るといった。

他の懲罰部隊陣も冴子と同様についてくるらしい。

大勢で行くのは音に敏感なく奴らに気付かれるから私一人で行くという、当然反対された。

祝詞を使うといったら冴子は渋々ながらも引いてくれた。一応全員には私はセキレイだということは説明してますよ？（原作陣にも）ちなみに、小室氏は逃げまとう人を助けようとしたらしいが、先の放送後の学園中に轟く悲鳴を聞いて助けられないと悟ったようです。

そして私は祝詞を使うために冴子と粘膜接触します。いわゆるキスです。

我が誓約の太刀 葦牙が鬼門 断ち切らん

うなじ辺りにある鵲鴝紋から祝詞使用時の羽が生え、全身から力が湧き出てくる。

初めて祝詞を使ったけど、すごいねこれ。鴉羽様の力っていうのもあるけど、これは使えない。正確には使っちゃいけない。だって今の私、軽く抜刀するだけで、この学校を吹き飛ばせる自信がある。

「これが、祝詞か……綺麗だ。絶対にかまれるんじゃないぞ、夏男」

冴子とのキスを見て百代が私にもさせるなどと騒いでいたり、弓子と由紀江ちゃんが黒くなったり、原作組みの呂h……宮本が不機嫌になったり、高城やらコータやら小室氏やらが赤面したりと騒いでいて、結構笑えない具合に<奴ら>になった生徒が集まっていたりしたが、それも祝詞使用時の私の居合い（出力約1%）で剣道場から居合いの射線上にある校舎を地面ごと切った。もっとも切ったのは集まってきた50体ほどのうちの7体くらいで、残りは衝撃波で体はバラバラになっていた。

学園の敷地が大体こんな感じになった。（およそ43%ほど瓦礫）

Ⅱ 残った部分。

Ⅱ 居合いで瓦礫と化した部分。

Ⅱ 剣道場

私もなるべく衝撃が伝わらないよう、結構上に向かって居合いを放ったのですが……

そして地面には大きい地割れが出来ている。他も瓦礫の山になっていて非常に歩きにくい。さらに校舎を切った音で<奴ら>が集まってくるのが見えるが、先の居合いで地割れに落ちていった。いくら地割れで剣道場に入れないからといっても、安心は出来ないから急いで鞠川先生を、もし間に合っていたら石井君も保護しよう。

結果だけを言えば、

保健室がなくなりました。

すぐ近くにはちゃんと鞠川先生がいましたよ？

ただちょっとというよりも結構服が破けていて、結構刺激的なファッショになっていました。薬品も鞠川先生の近くにリュックに入った状態でありました。

祝詞を使うのはやりすぎだと思いました。

ただ、その後剣道場に居た人たちと合流して、部活遠征用マイクロバスのキーを取りに職員室に行つて、石井君のことを聞いたら、どうも石井君が噛まれてく奴ら>になつて動き出した瞬間にすごい音とともに吹き飛ばされて、気が付いたら保健室がなくなつていたとのこと。もし、祝詞を使わなかったら鞠川先生はく奴ら>になつていた？まあ、深いことは考えないようにしましょう。

ちなみに職員室はかろうじて残つてました。もし私の居合いがあと1cmほどずれていたら職員室は無くなつていたと思います。

そして職員室でしばらく落ち着いていたら宮本が原作通りTVをつけて、埼玉報道を見た小室氏が騒ぎ、高城が宥め、とりあえずは家族の安否を確認することが目標となつた。

あと、川神市というよりも川神院と学園の事だが、本宅を通じて鉄心のジジイが頑張つてはいるが少々厳しいとの事。なるべく早めに援護に行くということになった。

あのジジイのことだ。厳しいと言ってるが、まだ余裕はあるのだろつ。ゆっくり行つてやるとしよう。

## 終わりの始まりと力の使い方（後書き）

### 説明

むぎつぶ  
麦粒

中央が最も太く、両端にいくにつれてだんだん細くなるもの。空気抵抗を受けた際の振動率がよく、遠くまで威力を弱めにくく飛んでゆくので遠矢や鎗矢などに用いられる。

シリアスブレイカーww

本来ならシリアスな場面なのにwww

代わりに次回はかなりシリアスに…

ちなみに敷地内での校舎の一はこんな感じだと思います。

校舎〃

敷地〃

夏男が完全に外道に…

## 学園脱出と秩序崩壊の兆し（前書き）

紫藤は居ません。今頃刑務所の中です。  
金髪が紫藤の代わりです。

そして百代がチート

汚いさすが公式チート汚い



## 学園脱出と秩序崩壊の兆し

どうも、今とてもイラついています、鴉羽夏男です。

何にイラついているのかと言うと、金髪がとても鬱陶しいです。斬つていいですか？ダメですか？そうですね、ダメですね。残念です。

今私達はマイクロバスの中に居ます。はい、あのマイクロバスです。

あの後『チーム』が結成され、マイクロバスを取りに行きました。ここで原作の階段のアレが出てくるかと思いましたが、階段どころか校舎そのものが一部を残し、ほぼ無いです。祝詞で消えました。

ということはあのタクゾウ一行とやらはく奴ら>に襲われる前に消滅したということに……知らぬが仏ですね。皆には黙っておきましょう。特に小室氏あたりなど。

当然『刺又』のアレはありませんでした。原作組や懲罰部隊組でも音を立てることは無くマイクロバスにたどり着けたのですが、く奴ら>もそんなに居なかったから先に全員バスに乗り込んだらエンジンを付ける予定でした。エンジンが付いて、いつでも出せるというところであの金髪がやってくれました。ええ、やってくれましたよ、盛大に。

音に敏感に反応するく奴ら>が少数とはいえ、まだ近くにいるとい

うのに大声で叫んでくれましたよ。待ってくれとね。バスに向かったたのを教室から見られたようです。

気持ちは分からなくないのですが、こっちからしたらたまったものじゃない。

でもバスの前に居たく奴ら>の注意をひきつけてくれたから好都合でしたので、そのまま鞠川先生にバスを出すように言おうとした所、小室氏が持ち前の正義感を発揮してくれました。バスの出発を遅らせています。

無理やりにもバスを出せばよかったですね、紫藤がいないから大丈夫だと思って放っておいたあのときの自分を殴ってやりたいです。

金髪が大声を出したからく奴ら>がその声に反応して金髪達に向かつていって、さらには先の大声で盛大に校舎の方から引き付けてきたく奴ら>も背後から迫っていたので何人か喰われてました。

原作組は金髪らを援護してバスに乗せたはいいいのですが、それと供に集まってきたく奴ら>にバスは包囲されそうになりました。

このままでは出せなくなるので、仕方なく私だけバスの先頭に出て、腰に差していた太刀を抜き、少しだけ強く刀を振りぬきました。ただそれだけでく奴ら>は面白いくらい吹き飛びました。

その光景を見た原作組はそんなでもないが、金髪らは『化物』でも見るような目で見てきました。確かに私は人じゃありませんけど、失礼ですね。

ちなみに百代は職員室からバスに乗るまでの道中ずっと物凄くいい

笑顔で＜奴ら＞を爪付き手甲で細切れにしてみました。冴子の言っていた無理に戦う必要はないという言葉を真っ向から無視して全部片付けてましたから、丸投げしました。実は百代は一回不注意で腕を噛まれていたのですが、どうやったのか持ち前の超回復で無事だったので心配はまったくしてません。他の懲罰部隊組はいくら囲まれても傷すら負わないで撃退できる人ばかりだから問題ない。弓子は相性の問題で厳しいものがありますが。

そして、開けたままにしているバスの扉につかまって乗り込むと、しばらくして金髪は騒ぎ出しました。

「ちっ、だからよお、このまま進んだって危険なだけだってば。だいたいよお、何で俺らまで小室たちに付き合わなければならねんだ。お前ら勝手に町に戻るって決めただけだろお。学校中で安全な所探せばよかったんじゃねーのか？」

「そうだよ、どこかに立てこもったほうが、さっきのコンビニとか

」

金髪の戯言にもやしが賛同する。するとここで鞠川先生の堪忍袋の緒が切れたようで、急ブレーキを踏み、バスを止めた。

「いいかげんにして！こんなんじゃ運転に集中できない！」

鼻っ柱をへし折られた金髪。

「っ！、んだよ」

「ならば君はどうしたいのだ？」

見かねた冴子が金髪に聞く。

「くっ……………氣にいらねえんだよ！こいつがあ、こいつが氣にいらねえんだ！」

そういい、小室氏を指差す金髪。どうやらコートもそうとう頭にきてたらしく、ピストルボウの狙いを金髪に向けようとするが、高城後輩が手で制してくれた。

「なにがだよ。俺がいつお前になんか言ったのかよ？」

指を指された小室氏は金髪に聞き返す。

「んだと、てんめえ！」

逆上する金髪。そして私は冴子に抜刀しようとしたのを柄頭を抑えられて止められる。

そんなことをしているうちに金髪は宮本に大身槍の柄の部分で袋たたきにされてました。いい気味です。

「最低」

厳しい口調で金髪を罵る宮本。いいぞもつとやれ。

車内全体に緊迫した雰囲気漂う。しかし金髪についてきた奴らは口々に宮本を非難する。やれひどいだの、やれやりすぎだのと、果てはもやしが全部君達のせいだなどとほざき始めた。

これにはさすがの私でもプツリ行きましたね。

冴子の静止を振り切って抜刀し、切先きっさきをもやしに突きつけて、言い放ちました。殺気も放ってます。

「おい、もやし。これ以上舐めたことをぬかしていると、斬るぞ」

汚いですね、漏らしてますよ。もやし。あーイライラしますね、無性に何かを斬りたいです。

私の殺気に当てられたもやしとそれ以外の奴らも顔を面白いくらい青くしてます。ちなみに私は何気なく金髪の顔を踏んづけています。ダメですね。こいつらの顔（特に金髪ともやし）を見ていると殺したくなってきました。外にでも放り出したいところですが、ダメですか？ダメですね。そういえば今交差点の真ん中で止まってますね。たしかこのあたりで＜奴ら＞が詰まったバスがこちらに暴走して来るはずですが、……来ましたね。ちょうどいいです。アレでストレス発散しましょう。

私は外に出て、＜奴ら＞が詰まったバスが来る方へバスを回り、居合の構えを取る。バスの外に出る時に冴子達は何を勘違いしたのか引き止めてきたが、こちらに向かつてくる暴走バスを指差すと納得がいったらしく、行かせてらえた。

今、鴉羽先輩が金髪らと一緒に来た黒上とかいう根暗な男子生徒に刀の切先を突きつけて黙らせている。

笑顔なのに異様に怖い。こっちは関係ないのになんで冷や汗が止まらないのよ！

って汚ったなー、黒上のやつ漏らした。

まあ、今の鴉羽先輩なら分からなくも無いわね、あれはあたしでも漏らすと思うくらい怖いわ。ていうか、気絶しなだけ意外と根性あるわね、あいつ。

あれ？鴉羽先輩突然扉に手をかけたけど、なにを　　って！？

「大丈夫だ、高城。むしろ今の夏男を止めたほうがまずい。それに

」

引きとめようとしたら毒島先輩に止められた。けど、やはり先輩のことは心配……じゃなくて何するのか気になるから目で追ってしま

そしたら、市営バスが高速でこちらに向かってきた。止まる様子がまるでないし、フロントガラスからく奴ら>の姿も見える。く奴ら>に噛まれている運転手の姿も。

鴉羽先輩はなにやら抜刀術の構えを取った。

ここに来てあたしも先輩が何をやるうとしてるのかわかった。

高城 s i d e e n d

冴子 s i d e

今私の目には真つ二つになった市営バスが見える。

夏男が斬ったのだ。

たしか、角田とかいう2年の戯言からが始まりだな。

彼のあまりにも身勝手な言い分に夏男は怒りを表す。

彼が宮本に打ちのめされた後、彼についてきた奴らの身勝手な言い草に夏男は抜刀し、根暗な2年男子に切先を突きつける。

夏男とは長く一緒に居たが、あの温厚……でもなかった夏男の微笑以外の表情を見たのは本当に久しぶりだ。アレはそうとうキているな。

その後、突然扉を開き、外に出て行った。まさかと思い、何処に行くのか問い詰めると市営バスがこちらに向かって爆走していると教えられた。その瞬間に夏男が何をしたいのかを理解した。

夏男はこちらに向かって爆走してるバスに向かって居合の構えを取

り、間合いにバスが入った瞬間に構えていた太刀を一閃。

結果バスは綺麗に真つ二つ。中に居たく奴らゝはその時の衝撃波で体はバラバラだろう。

まったく夏男はいつもデタラメだ。理不尽な強さを持つ世界最強であり、最愛の男。

ああ、夏男の居合を見ていたら興奮して、体が火照ってきた。夏男がほしい。私の体が直に訴えてくる。

フッフ、私をこんな体にするとは夏男も罪な男だ。

さて、この落とし前はどうつけてくれようか。

冴子 s i d e e n d



## 学園脱出と秩序崩壊の兆し（後書き）

ついに学園を出ました。思ったよりシリアスじゃなかったね。

そして夏男君はついにキレました。

市営バスだけでなく、道路とその先にある歩道橋もまとめて斬つてます。学園のほどじゃないが、当然地割れもあります。

百代は<奴ら>を10体ほど集めて全部細切れにしてたときに1体をもらして、その1体に腕を噛まれました。

その1体は当然細切れ。

そして噛まれた百代を見た夏男君が<奴ら>になる前に噛まれた腕を切り落とそうとしますが、その瞬間にジュウウウウウという音とともに噛まれた場所から煙が出て、腕が再生しました。当然<奴ら>になることはありません。

マジチートです。

そしてストックがついに切れた！

連投記録が虫の息

土日頑張つて量産します。4話ほど。

ちなみに次回は冴子先輩の夏男君との濡れ場を書こうかと……

## ストーリーカーと始まる苦難（前書き）

難産でした。

今話から原作を離れていきます。

ストックがたまらなかった……（、・・、）

## ストーリーカーと始まる苦難

どうも今鞠川先生の友人宅に居ます、鴉羽夏男です。

あの後どうしたのか？もちろん金髪らは生きてますよ？…… たぶん。

ただ、今頃バスは動かないでしょうね。ガス欠とかで。鞠川先生の後ろに座っていた私には見えたのです。ガスメーターがEを差していたのを。

なので、あの後は橋の近くまで行ってバスを降りました。紫藤もないし、金髪もまだ伸びてるし、私が居るのもやしや他の奴らも特に何も言ってくることは無く、簡単に降りれました。ちなみに百代はバスに乗ってからずっと寝てました。そして私の原作知識もここでなくなりました。これから何が起こるかまったくわかりません。

そういえば橋に行く途中に藤美の女子を一人拾ったのですが、そのカチューシャで上げているクワガタを髭髯ほっぺさせる特徴的な前髪の女子には見覚えがあったのですよ。たしか名前が夕樹玖美だか美玖だか。よく覚えてないです。

2年の時に同じクラスになった時のことですけど、私夕樹に告白されているのですよね。別にそれくらいならどうということはないのですが、私が言うのもなんですが、鴉羽様の容姿をしている私は結構モテていまして。でも、私の周りには冴子を始め百代とか弓子と

かが居たので告白もそうでもなかったのですが、彼女だけは違いましたね。

告白をしてきて、私はそれを断ったのですが、1週間後にはまたすぐに告白してきたのです。当然断りました。そしたら翌日の朝、下駄箱に告白の手紙が大量に入っていました。開けたら雪崩落ちるほどの。ちなみに全部夕樹からのです。

あと、どうやってアドレスを知ったのかは知らないが、夕樹から1時間以内で1件1件の内容がまったく違う告白メールを100件は超える数で送りつけられて来ました。ちょうどその時期に学校が終わって屋敷に帰ってる時に誰かにつけられている感じがずっとしてましたし、家に居ても誰かに見られてるような気がしてました。それが1ヶ月ほど続いたと思ったらプツリとなくなったのは謎です。ただ、授業中や休み時間など教室に居るときに夕樹の席がある辺りから熱っぽい視線を感じるようになったのはそれらが無くなってからとほぼ同じ時期になりますね。

その夕樹なんですけど、バスに乗り込んで最初の所に座っていた私を見た瞬間に頬を赤らめ、目を潤ませて迫ってきました。私の隣に座っている冴子に止められてましたが。ついでに弓子や由紀江ちゃんとは何かその時だけ起きた百代から黒い視線を感じました。

当然付いてこようとはしましたが、残ってもらいました。原作知識も無くなっていつ何が起るのか分からないので、せっかく原作組と懲罰部隊組で取れていたバランスを崩したくはないのです。人でなし？外道？痛くも痒くも無いです。夕樹を連れて行った事によっても懲罰部隊組に何かあったとしたらそっちのがよほど痛いです。その代わりに川神市とく奴ら>の特徴は彼女だけに教えました。あとはどうするかは彼女次第です。

閑話休題。

今私は裸エプロンの冴子と一緒に2階のとある部屋に居ます。私の理性はまだかろうじて持つてはいますが、いつ切れるか分かりません。ちなみに他の人達は下で飯を堪能中で、私達の前にも盆に載った晩飯があります。コートと小室氏がライフルやらなにやらを見つけた部屋の隣です。

裸エプロンの冴子が腕を絡ませてあーんをしてくれます。ええ、あの『あーん』です。そして胸も当ててきます。

当たってるぞなんて言ったら、悪戯っぽい笑みで当ててるのだよと返されました。顔が赤いのは自分でも分かります。今夜の冴子はいつよりも積極的です。そしてそんな自分の容姿を理解している分性質が悪いです。

飯も食い終わった頃、冴子はしな垂れかかっています。

全体重を預けるように体を私の上体に乗せてきます。冴子の豊かな胸が私の胸板に挟まってつぶれ、なんともいえない感触を伝えてきます。

「なあ、夏男」

瞳を潤ませて見つめてきます。危ないですね、あまりの色っぽさに襲うつてしまふところでした。煩惱退散煩惱退散と。

「なんだ？冴子」

セキレイと葦牙の絆を通じてなんとなく冴子が何をしたいのか分かるような気がしますが一応聞いてみます。このような事って実は何回かありまして、主に剣道の大きい大会で勝った時とか、全国で優勝した時とか、帰ってきた夜はたいていこついう事になります。

「夏男の居合を見てから体が火照って仕方がないのだ、今まで我慢してきたというのにまさかお預けはないだろうな」

そういつて唇を重ねてきた。舌も入ったディープなやつです。お互いに唾液を交換するように長いキスをし、淫靡な水音を立てます。

やはりですか。まったく何故こついう時ほどセキレイと葦牙は互いに反応しあうのでしょうか。私までその気になってしまったのではないか。

「私の火照りを鎮めてくれ」

艶っぽい声で言われ、そのままベットに押し倒されました。エプロンもいつの間にか取っけていて形のいい豊満な乳房が完全に姿を現します。

それを見てついついこのセリフを口走った私は悪くないと思います。

「童貞にはそんなおっぱい目の毒です」

「何を言っている。4年ほど前に卒業しただろ？」

そう言つて私が着ている懲罰部隊服を脱がしていく。今の私はあの灰色の羽織を取った状態です。羽織は1階にあります。ブーツも玄関にあります。

冴子は服が脱げて露になった胸板に口をつけて吸う。私はそんな冴子の乳房を愛撫します。

「ん、あんっ」

冴子が嬌声を上げて、両腕を蛇のように首にまわし、抱きついてきてまたキスをします。私は手を緩めずに攻め続ける。しばらくそうして愛撫していると突然犬の鳴く声が聞こえました。

その瞬間に私と冴子は跳ねるように飛び起き、懲罰部隊服に着替えます。もし聞き間違いではないとしたらその犬はこの家の近くで鳴いているということになるからです。

「冴子」

「分かっている。この埋め合わせは必ずするのだぞ」

「ああ」

着替えを終わらせて、言葉2、3交わしたら私と冴子は部屋の隅に立てかけている太刀と刀を腰に差し、1階に下りて、玄関に向かいます。

そしたら玄関にはもうすでに弓子を抜いた懲罰部隊組がそろっていました。弓子のことを聞こうとしたら矢が人体に刺さる音が聞こえたので、そのままブーツを履いて、玄関から出て犬が居るであろう所へ走っていきました。

結果だけを言うと。



小さい女の子を拾いました。

特に他意はありません。稀里ありすという名前らしいです。

犬の鳴き声で集まってきたく奴ら>を片っ端から殲滅していったら偶然見つけたので保護しました。その時に一人の中年の男の人にしがみついて泣いていたのが見えたので、大体の事情は察しました。一応犬も連れて来てます。あのまま野放しにして、いつまたく奴ら>を呼び寄せるか分かったものじゃなかったのです。ちなみに原作組は先まで全員寝てました。

今は一緒に稀里のこれからのについて皆で相談中です。

そして私は今我々がこの住宅でのんびり相談している時も世界事情は刻一刻で変わって行っていると実感してます。

川神鉄心と京都の本宅からの連絡です。

まずは京都の本宅ですけど、要約すると非戦闘員がく奴ら>に噛まれるのを阻止出来なかったらしく、本宅にく奴ら>の侵入を許してしまつたらしいです。戦闘員も何人かやられているとか。先代鵜鴯とは言っても80過ぎのジジイですから分からなくもないですけどね。とりあえず至急向かうから持ちこたえろと返しました。

そして川神鉄心ですが、こっちは分かりやすく言うと今世界中で無事な都市は川神市を除いてもうほとんど無く、川神市周辺のく奴ら>も増えて本格的にキツくなってきたから応援を頼むだそうです。

これで決まりですね。とりあえず本宅に救援に行ってから川神市に向かいますか。

さて、皆に説明しないといけないから大変ですね。特に冴子とか。

## ストーリーと始まる苦難（後書き）

夕樹エ…

冴子ら懲罰部隊組は絶対何かしてますねwww

そしてエロ描写難しいです。まったく進みませんでした。  
依然ストック0の状態。

今にも連投記録ががががが

そして次回夏男君は祝詞を使って京都に……

## 世界崩壊と優先される葦牙（前書き）

難産でした。

結局ストックたまりませんでした。

三人称って難しいです。

そしてついに切れます連投記録。

明日は親の都合でおそらく投稿できないかと。  
本当にごめんなさい。

## 世界崩壊と優先される葦牙

どうも鴉羽夏男です。

今冴子と一緒に京都に向かっています。

説得に失敗しました。最初は私だけで京都に向かうつもりだったのですが、祝詞を使っているから1晩もあれば十分に京都の本宅まで行って床主に戻ってこれるので、実は大して痛手でもないのです。

で、その時の説得なのですが、こういう感じになっています。

三人称 side

床主市の御別橋の程近くにある住宅に10人の高校生ほどの男女と1人の子供と1匹の犬。

それらは今1人の子供の今後について相談をしていた。

「ありすちゃんは今から俺達と一緒に来るといいことではない？」

宮本がやさしく稀里に聞く。

「うん」

小さく稀里は宮本に返す。

そこへ今まで黙して成り行きを見ていた一人が口を開いた。

「少し聞いてほしい」

何かを相談している時はあまり口を出さずに事の成り行きを見守ることの多い彼が珍しく口を開き、ひどく深刻な声色で告げてきた。

「悪い知らせが2つほど、今先京都の本宅と川神鉄心から連絡があった。どっちから聞く？」

男の名は鴉羽鵲鴿夏男。日本有数の名家鴉羽の若き家長であり、剣術の達人でもある。

その夏男が先ほど言った京都の本宅とは京都にある鴉羽家長の屋敷で、およそ300年ほどの歴史を持つ武家であり、独自の諜報部隊を持つことで有名である。

そして川神鉄心とは鴉羽夏男と並び武神として世界中より畏怖の対象となっている川神院のトップであり、川神学園の学園長でもある。米国と個人で不戦条約を結んでいることが有名。

夏男に比較的近い立場に居る彼ら彼女らは夏男のその言葉の意味を瞬時に悟る。あの人に知られる前に自分で何でも処理してしまう夏男がわざわざ言わなければならない事、それは果たしてどれほどの

ことが、皆固唾を呑んで夏男の言葉を待った。

特に川神市出身の川神百代と矢場弓子は気が気でないのだろう。

「鉄ジイからだ」

川神百代が言う。彼女の名前から想像できる通り、川神鉄心は彼女の祖父にあたる。そしてそんな二人と近い彼女だからこそ分かる。あの川神鉄心が鴉羽夏男を求めなければならぬ程の事。おそらく川神市のことであろう。

川神百代と同じく夏男に近い矢場弓子も川神市からこの床主市に単身で来たため、家族が川神市に住んでいし、百代ほどではないが、同じく川神鉄心がある程度知っているので、これからの夏男の言葉はあの川神鉄心が鴉羽夏男をたよらなければならない程の事と捉えている。

「そうだな、要約すれば川神市を除いた世界中のほとんどの都市が<奴ら>により壊滅している。今中国やロシア、アメリカなどの国家元首が川神市に避難していて、他にも続々と到着しているらしい。そして<奴ら>も増え続けているからこのままだと川神市が危ないだそうだ」

夏男のその言葉を聴いた全員は想像以上の事の大きさに唖然とする。なぜなら夏男の今言った言葉は人類は滅亡寸前であると言っているようなものだから。

「本宅の方はなんだ？」

いち早く正気に戻った冴子が夏男に聞く。

その瞬間夏男は苦虫を噛み潰したように顔を歪めて言う。

「本宅はく奴らへの侵入を防げなかったらしい。戦闘員も何人が噛まれていて、対応に追われているも、まったく間に合わなく、今にも屋敷が落ちると」

それを聞いた冴子は今度こそ言葉を失った。

2つの悪い知らせ。これらはあまりにも笑えない知らせであった。

「とりあえず、これから私は京都の本宅に行くつもりだ。他の皆は一刻も早く川神市に行ってくれ」

「ちょっと待て。夏男は一人で行くつもりか？」

夏男の言葉を聞いた冴子は瞬時に問い詰める。

「ああ、私だk「ダメだ。一人では危険すぎる。私も行く」……」

「私もだ。夏男」

一人で京都に行こうとした夏男に冴子を始め、百代や懲罰部隊組、原作組まで付いてくるといった。

「付いて来てくれるのはありがたい。だが、今回ばかりはダメだ。京都は遠すぎる。普通に高速を使えば1晩でいけるが、今はそんなことできるわけが無い、ましてや歩きでは時間が掛かりすぎる。だが私はセキレイであり、鶺鴒だ。ここから京都までの道のりを1晩



で走りきる事が出来る。だから私だ、それに川神市のこともある。おそらく川神市は今鉄心が頑張っているのだろが、あれでももう年だ。今は大丈夫だが、そう耐えられる訳ではない。そうなれば終わりだ。だから君達には川神市に向かつてほしい」

夏男が説得するも、一人で京都へ向かうの危険すぎるから、せめてもう誰か一人と一緒にいくという結論になった。

そこでも誰が行くかでもめたが、結局祝詞を使うということで冴子に決まった。百代ら懲罰部隊組は黒いオーラを発していて、作組の宮本も若干黒いオーラを出していた。

その後、鞠川校医友人宅を出る準備の整った一行は川神市行きと京都行きに分かれた。

京都行きは祝詞を使ってく奴らゝをひきつけながら京都へ向かい、川神市行きは何故かあったハンヴィーに乗って川神市へ向かう。

そして夏男と冴子は祝詞を使うために粘膜接触をする。

うなじにある鵲鳩紋から祝詞使用時の羽が現れて夏男の全身から力が湧き出し、薄い灰色の光に包まる。

それと同時に凄まじい力の奔流に周囲は風が吹き荒れ、アスファルトの埃が巻き上げられる。

そして冴子は聞く、太古のセキレイの遺伝子を通じた夏男の声を。

『幾久しく』

やがて風は止み、そこに現れたのは互いに抱き合う夏男と冴子の姿だった。

それを見ていた懲罰部隊組は盛大に黒いオーラを発しながら葦牙つてずるいとか思ったり思わなかったり、初めて見た稀里は頬を赤らめていたり、原作組男性陣は夏男の体を覆う幻想的な灰色の光に魅入っていたりと割と賑やかである。

夏男は冴子の肩と膝裏に手をあて、ひょいと冴子を持ち上げる。いわゆるお姫様抱っこをする。

「な、夏男!？」

突然のことに顔を赤らめて慌てる冴子に夏男は内心可愛いなと思っ  
ていたり、それを見た懲罰部隊組はまた黒いオーラを出したり、つ  
いには「ずるいぞ! 葦牙イイイ!」と百代が騒ぎ出したり、  
百代止めようとしたコータが殴られていたり、ジークと名づけられ  
た稀里と一緒に居た犬が集めてきた以上のく奴ら>が集まってきた  
りと、物凄く笑えない状態になっていた。

「仕方が無い」

苦笑いする夏男はそう言つて冴子を空に放り上げてから刀を抜き、  
集まってきたく奴ら>を祝詞の力で薙ぎ払って殲滅した。

「今のうちに行け」

いまだ騒いでいる川神市行きを諫めた。諫められた川神市行きは今  
思い出したかのようにハンヴィーに乗り込んで、先の薙ぎ払いでく  
奴ら>が集まってくる前に川神市に向かって猛進した。

ハンヴィーが見えなくなったのを確認した夏男は上から聞こえるかわいらしい悲鳴を聞いて、そういえば冴子を空に放り上げたと思出し、急いで自分も跳んで冴子を回収するのだった。

跳んで空中で冴子を受け止めた夏男はそのいきなりの逆バンジーでの涙目と上気してほのかに赤くなった破壊力抜群の顔を見て鼻の奥が微かに鉄の臭いに染まった。

「はあ、はあ、よくも投げてくれたな」

逆バンジーの絶叫で息が乱れている冴子が夏男を睨む。

「< 奴ら>が集まって来ていたから仕方が無かったのだ」

「まったく、夏男は。少しは誤れ。……その、……怖かったぞ」

あきれた様子で言う冴子は後半恥ずかしがるようにそっぽを向いて言った。

「それは、悪かった」

その反応を見た夏男は表面は誤りながらも内心可愛すぎるとか思っていた。

「まったくこれだから夏男は。内心可愛いとでも思っているのだろう？」

的確に心のうちを言い当てられた夏男は動揺した顔をとっさに隠せなかった。

「これはその罰だ」

そついい、いまだ動揺している夏男の唇を自らの唇でふさいだ。

ちなみに落下する冴子を夏男が空中で受け止めた時から二人は祝詞の力を使って時速に換算するとおよそ380kmの速さで京都に向かっていた。

三人称 s i d e e n d

という感じで今私と冴子は京都に向かっています。そしてつい先ほど京都に入りました。早いですね。まだ移動してから70分かそこらしか立ってないというのに。

おや、本宅のある辺りから火が上がってます。これは急いでいかなければ。

アレからたった90分しか経ってないのでおそらく間に合っていると思いますが、万が一があるので、急ぎます。

そして屋敷前に着きました。

そこで私と冴子は見てしまいました。

ええ、見てしまったのです。

<奴ら>になっている父とその父に噛まれている祖父を。

## 世界崩壊と優先される葦牙（後書き）

完全に原作から離れました。

ここからオリジナル入ります。

今この時点で各国首相は川神市へ向かっています。核弾頭は発射されません。

そしてドイツのフリードリヒ中將は今頃クリス嬢のもとにいます。

冴子と夏男を抜いた懲罰部隊組と原作組は川神市へ向かいます。

前回のエロシーンもたいしたことが出来なかったので、少しイヤラブさせてみました。

ちなみに祝詞使用時の力の奔流は夏男君から湧き出る力がもれて具現化したものという設定です。早い話、初期ナトの九尾の衣の暴走なしバージョンを想像してくれば。

そして夏男君のスペックについてですが、次回かその次に投稿します。

あと、次作は明後日か明々後日に投稿します。

そして、今回は夏男君は決断を迫られます。

## 決まる覚悟と新たな始まり（前書き）

### 夏男君の祝詞

我が誓約の太刀 葦牙が鬼門 断ち切らん

### 能力

身体能力強化：読んで字のごとく身体能力全般を強化（約10倍）  
体力回復：精神的、肉体的疲労を全て取り除き、体力を回復させる。  
刀剣扱い：刀や剣などの刃物類の取り扱い技量が上昇（約5倍）

### 備考

前世の状態の夏男君の戦闘力は高校生と殴り合って体力で負ける程度で、鴉羽様の力（鵲鴿基幹？）を手に入れた夏男君は本気を出せば2千メートル級の山を更地にすることが出来る程度。

## 決まる覚悟と新たな始まり

どうも鴉羽夏男です。

今冴子と一緒に京都の本宅に来ております。

何故京都に居るのかというと、実は鞠川先生の友人宅にいた時に＜奴ら＞の侵入を防げず、侵入した＜奴ら＞の対応を急いでいるもまたく間に合わなく、今にも落ちそうだと連絡があつたからです。

それと同時に川神鉄心からもそこまで深刻でなくとも似たような内容の連絡がありました。

それで私、冴子とそれ以外に分かれてもらって、私と冴子が祝詞を使って本気で京都まで走ってきました。その他には川神市に向かつてもらいました。

そして京都の屋敷に着いた私達が見たものは最悪でした。

＜奴ら＞になった父とその父に噛まれている祖父です。

え？どういうことですか？父上よ、あなたともあろう人が……いや、そつえばあなたはまだ人でしたね。祖父と違って。



ていうかジジイよ、あなたこそなにやってるんですか？『わしは人をやめたぞおおおお！』とか言って私が鵲鴿就任した直後に斬りかかってきたじゃないですか。ちなみに冴子は私の魔改造で中3の頃に人間をやめてます。それとなく気の扱いを教えるは居ますが、どうやらそれが氣だと気付いてないようです。

まあ、教えてるのは身体強化と動体視力上昇だけですけど、それでもすごいです。木刀で木刀を斬ってました。滑らかな切断面でしたよ。もつとも私は木刀で鉄骨を切れますけどね。

まあ、いいです。今はそれよりも父です。

とりあえず父をジジイからはがします。さて、どうしますかね。父と言っても私、中身を入れると40前のおっさんですからね。今18の前世(?)21ですからね。ちょっと年の離れたお兄さんという感じでしたし、あまり父って感じがしません。ちなみに母は3年ほど前に他界してます。

それでも肉親なのでやはり斬るのはためられます。

私が内心葛藤しているとジジイが父だったものを斬ってしまいました。ずいぶんとあっさりしてますね。ジジイ。なんか一仕事を終えたぜ的な幻聴が聞こえてきそうです。

あと、噛まれた右腕で額の汗をぬぐわないでください。シールドです。痛くないのでしょうか？そして血まみれの顔で近づかないでください。怖いです。

「遅かったのう、夏男」

これでも急ぎました。普通なら1晩かかるところを70分で来ました。

「まあ、よい。見ての通り鴉羽は終わりじゃ。そしてわしももう長くない。川神市へ逃げるんじゃ」

もとよりそのつもりです。

「悪いがこいつでわしに介錯をしてくれんかのう」

今までのようにふざけた様子はなく、真剣な表情でジジイは自分が持っている刀を渡してくれました。

どうしましょう。鵲鴒を襲名してからことあるごとに『勝負じゃあああああ！』とか言つて斬りかかってきて果てしなく鬱陶しかったけど、いい人なんですよ。このジジイ。昔鴉羽様の力に引つ張られてどうしても人が斬りたくて斬りたくて仕方が無いなんて事があつたんですけど、その時に私を立ち直らせたのがこのジジイですから、実は結構感謝してるんですよ。そのジジイの頼みだからできる限り聞いてやりたいけど、でもそんなジジイだからこそ死んで欲しくないんですよね。

さて、どうしましょう。

冴子side

今私は夏男と供に京都の本宅に戻ってきている。

けれど本宅に戻った私達が見たものはあまりにも惨状だった。昔から本宅に仕えていた使用人などの仲が良かった人たちが皆軒並みく奴ら>になつていたり、まだく奴ら>になつては居なくともく奴ら>に噛まれていたり、本宅についた火によつて生きたままに焼かれている人などだった。

そして何よりも目を疑うのはく奴ら>になつた隼人さんとその隼人さんに噛まれている先代鵲鴒だ。

その光景を見て私と同様に夏男も固まっていた。

先代鵲鴒は隼人さんだったものを斬つてから、こつちに向かつて来て、夏男に介錯をしてくれと言った。

そついわれた夏男は俯いてしまつて表情は見えないが、おそらくいいものじゃない。昔からどこか苦手意識を持つていても大切の一人に入つていたから、だからこそ本宅が危ないのを聞いてこんなにも急いだのだろう。

先代鵲鴒は夏男をジツと見つめているが、その顔色は時間が経てば経つほど悪くなつていく。そして何かを決意したのか夏男は顔を上げた。

「これしきのことです泣くでない、わしはそんな覚悟も無い者に12年前刀を渡した覚えはないぞい」

夏男は泣いていたのだ。僅か2粒の水滴、しかしそれは確かに夏男の頬を伝った。

今まで夏男と供に居て、最も近くから夏男を見続けてきた私はこの時確かに夏男の『涙』を見た。

「何を言っている、覚悟などとつくに出来てる」

その声を聞いた先代鵲鴒は満足した顔で背を向け、地に膝をついて脇差を取り出した。

それを見た夏男は刀を上段に構える。

上段に構えたその刀は鴉羽特有の『刀に血を付けない斬り方』で斬ったおかげか、無数のく奴らゝを斬っていたはずなのにまったく汚れがなく、綺麗な刀紋を見せた。

夏男の構えのおかげでその刀紋も燃え盛る屋敷に照らされて、まるで炎を纏っているかのような幻想的な光景を見せつける。不謹慎だが綺麗だと思ってしまったのは仕方が無いのだろう。

先代鵲鴒は脇差で切腹をし、そして夏男は刀は振り下ろした。先代鵲鴒の頭部が首から離れ地面に落ちる。首の切断面から血が滝のように吹き上がり、全身で先代鵲鴒の血を浴びた夏男は空を見上げている。その背中は酷く小さく見えた。

「夏男」

「大丈夫だ、問題ない」

ん？何かがおかしい。

何故か夏男の声にそれとなく喜びが含まれているような気がする？

冴子 side end

泣いてるようです、私。今生では初めてですね。

3年前の母や先ほどの父の死でさえ何も思わなかった私ですが、ジジイの死で涙するのはやはり精神年齢的にどこか父だと思っていたからでしょうか？

まあいいです。今はそれよりも大変なことが。

介錯をしたはいいのですが、どうしましうね。この興奮を。

あの後私は心にポツカリ穴が開いたような虚しさにしばらく空を見上げましたが、刀を振り下ろした時のこの手に感じた頸椎を断ち切る感触はなんともいえない快感を与えてくれます。

今までさんざん＜奴ら＞を斬ってきましたが、実は私、鴉羽特有の『刀に血を付けない斬り方』で斬っていたので、本当の意味では人を斬ったことは無かったのです。

この『刀に血を付けない斬り方』は、刀に血が付いて切れ味が落ちるという常識を『血を付けるよりも早く刀を振れば切れ味が落ちないのでは？』を理念に剣速を徹底的に上げることによって実現した斬り方で、斬ったときの手ごたえがほとんどなく、あっても簀巻き

を斬った程度なので、この斬り方をしている鴉羽は本当の意味では『人を斬る』というのをしたことが無いのです。

そして今私が持っているジジイの刀には血が付いています。ええ、私。初めて『人を斬る』ということをしました。

どうやら人を斬ったことに鴉羽様の力が反応したようです。この衝動の起因がまさか昔止めてくれた人を斬ったからになるなんて皮肉なものです。

でも一回止められたからか、抑えられないほどでもないですけど顔には完全に出てます。

冴子には見せられない顔ですね。

発散するには屋敷にいるく奴ら>全員を切るしかないようです。

それに今のこの屋敷の惨状。どのみち斬らなければならないようです。

ですが、私はジジイを斬ったことで思い出しました。

昔鶺鴒就任時に聞かされました『家長としての覚悟』

『家長たるもの。長たるな。父たれ』

先ほど言っていた覚悟とはこのことだろう。

家長というのは上司ではなく、父である。権力に酔うことなく、父のように子が悪いことをすれば叱り、良い事をすれば褒める。皆の

父として家全体を見守る役目。それが家長である。

それがジジイが私に教えたかったことだと思います。

ならば、

墜ちた家を斬るのは

鵲鴒となり、

家長となり、

皆の父となり、

そしてセキレイである私の

役目なのではないか？

私は何処かこの第2の人生をゲーム感覚で生きていたのかもしれない。

確かに今の鴉羽などは神に便宜を図ってもらってこの世界で生きやすくするためのものではしたが、それだけではないようです。

この世界では確かに太古にセキレイが互いに争い、そして鴉羽様とその葦牙が生き残った。だから今は鴉羽がある。夢や幻想などではない。確かにある存在。

私は今回のことで、今更ながらもやっと鴉羽の鵲鴿というシステムに『鵲鴿』として『鴉羽に連なるもの全て』を守り、『鴉羽に連なるもの全て』より『愛される存在』という太古より続く『葦牙を守り、セキレイを愛する』セキレイと葦牙の絆を見出しました。

あの神のことはやはり気に入りますが、なかなかいい仕事をしてくれます。

そのことに気付いた瞬間に今までの激しい興奮が一気にさめていったのを確かに感じました。

その後、今生での18年で一番に穏やかな心で屋敷内に居た全ての<奴ら>を『斬り』京都の自宅を放棄して川神市に向かいました。

さて、川神市に行ったら皆に言わなければならないことが出来たようです。

それが私のこの世界で『生きていく覚悟』なのだと思います。



そう決めた私は以前から感じていた心の奥のしこりが取れたような気がしました。

おそらく私は今まで前世の死に対して納得してなく、私の中の時間があの事故の時から止まっていたのでしょう。

今やっと前に進めたような気がしました。

決まる覚悟と新たな始まり（後書き）

。・・・（）、・・・。イイサイシュウカイダッタナー

続きます

## フラグ回収と反撃開始（前書き）

11話です。

これから夏男君達は反撃していきます。

たぶんキャラ崩壊があると思います。そして原作組はこれから出番がかなり少なくなるのかと……

## フラグ回収と反撃開始

どうも夏男です。今川神院のとある道場で錚々たるメンバーが一堂に会しています。

え？皆への告白とかはどうしたのか？当然しましたよ。

自分が神によってこの世界に送られてきた事。

前世の記憶がある事。

この世界の事。

そして神から世界改編を頼まれた事。

全部言いました。ていうか今になって思いました。何も原作組にまで話す必要は無かったのでは？

そのおかげで小室氏との間に少々確執ができてしまいました。まあ、たいした問題じゃないのでいいですけどね。

なぜそれらの知識を活かしてより多くの人を助けなかったのだと。そんな小室氏には申し訳なくもないですが、とりあえず少々きつめの口調で『魔女狩り』とだけ言っておきました。小室氏は何のことだとても言うように首をかしげていましたが、高城後輩は確り意味

がわかったようです。さすが天才。普通に説明は丸投げしました。これからは原作組には出る幕が無いので、たとえどのような答えを出しても私には関係ないですけどね。

まあ、そんなことがありましたが、今ここは川神鉄心を始め、私や黛剣聖、川神院師範代、武道四天王、九鬼家従者部隊上位やら、果てにはクッキー第2系体などのありえないメンバーが集まっています。主にこれからく奴ら>をどうするかについて。

本来なら厳粛な雰囲気を漂わすはずであつた道場は今……

「クリスの安全保障のために今すぐく奴ら>を殲滅するべきだ!!」

「フハハハハハ。九鬼揚羽、降臨である」

「鉄ジイ、まだか？いつになったら暴れられるんだ？」

「……………」

「自己紹介が遅れたな。クッキー第2形態だ」

「盛ってる猿とか動物園に帰って欲しいんですけど。アタイが身の危険感じるんですけど」

カオスだった。

上からクリスパパ、九鬼揚羽、川上百代、黛剣聖、クッキー、まだ絶滅していない事に驚愕したガングロヤマンバの女子(?)生徒で他はいえ仲間内で取っ組み合いを始めたり、寝ていたり、酒飲んでいたりともう本当に何かなにやら。頭痛い。

え？何か変なのが混ざってる？知りませんよ。

個性ありふれた、というよりも個性しかない個性の塊のような人たちが集まっていれば超常現象の一つや二つくらい普通に起こりそうだから気にしちゃいけないと思います。そもそも私からして超常現象のような存在だし。

そしてどうやらこの場で比較的まともなのは私と川神鉄心だけらしい。

「……どうすればいいのかのう。夏男君」

「私に聞かないでください」

ちなみに冴子は懲罰部隊組と一緒に留守番してもらってます。懲罰部隊組でこの場に来てるのは百代だけです。原作組は言うまでもなくお留守番。そして眠いので早く帰りたいです私。帰っていいですか？

「待つんじゃ、夏男君！この人外魔境をジジイ一人だけで切り抜けるというのか！？」

なんか帰ろうとしたらしがみつかりました。ジジイにしがみつかれなくても気持ち悪いだけなのでやめてください。ていうかあなたが騒ぐから百代がこっちに気付いたじゃないですか。

そして百代さんは何故般若がごとき形相で私のほうへ来るのでしょうか？そしてジジイは放して

ください。ブツブツ言っている百代の爪付き手甲攻撃を避けられない

じゃないですか。

今にも振り下ろされそうな手甲。背に腹は変えられずにジジイを盾にしてやり過ごす私。

斬られて紅い華<sup>あか</sup>を咲かせるジジイ。あなたの犠牲はたぶん忘れません。そして斬られても誰からも何も言われない川神鉄心憐れ。

「なあ、夏男。私達は結構な付き合いになってるよな？」

「そ、そうだが？」

有無を言わせない雰囲気でお詰め寄る川上百代。怖いです。そして両手の手甲を杭のように使って私を畳に縫い付けないでください。普通に痛いです。

「それなのに、それなのに、それなのに、何でいつもいつも冴子が優先されるんだ？ たしかに私は冴子と比べて夏男との付き合いは短いけど、私も夏男とそれなりに付き合いも長い、今まで私が夏男と何かしたときにはすでに冴子に先を越されて結局何も出来なかったけど、これからは素直になるぞ……そ、そうだろ？ 最初から我慢する必要なんてなかったんだ。よし、夏男。私はもう遠慮はしないぞ。自分に正直なるぞ。だから……そ、その……わ、わた、わた、わたすと……その、き……キ、キ」

やってる事はホラーですが、顔を赤らめて恥ずかしながらも何かを言っている。なんでしょう、このかわいい生き物は。そして手甲を杭のようにして畳に縫い付けた私のマウンドを取っています。なにやら目を閉じて顔を熟れ切ったトマトのように赤らめて私に顔を近づけてきます。

どうやら私にしがみ付くジジイを見て何かが吹っ切れたようで、ここまでされて私もさすがに分かりました。高校入学時にフラグが立っていた事は知っていましたが、ずっと放置していた付けが今回つてきたようです。

いつの間にか静まり返っている道場。あちこちから突き刺さる視線。血溜りに沈む私とその私に覆いかぶさる川神百代。そして近づいてくる百代の顔。

「ま、待て百代。今ここだとまゝ　　むぐっ!？」

抵抗むなしく、唇をふさがれてしまいました。そして百代は私の口を無理やりあけて舌を入れてきす。

ぴちゃ、ずちゃ、と水音を立てて互いの唾液を交換するようなディープキス。口内を蹂躪され、唾液を吸われたと思ったなら舌を伝って入ってくる唾液。

いつの間に手甲を外したのか、爪で畳に縫い付けられたままの私の首に腕を回すように抱きついてくる百代。

静まり返っている道場に響くキスの音。いまだ回復してなく、同じ血溜りに沈んでいる川神鉄心。それに目もくれずにこちらを見る道場に居る全員。

「ふむ、これは少々気をつけねば、クリスに付かないよう護衛を強化しよう」

「ふむ、私も少し素直になっってみるか……」



「……（……頑張るんだぞ、由紀江）」

「キスしていいのは、キスされる覚悟のあるやつだけだ！」

「ちょっとアタイの前でラブるとか喧嘩売ってるやつ。マスカラで目玉染め上げたいんですけど」

外野が何か言ってますが、まったく聞こえません。首に回した腕をギョツとする百代の胸とかが当たってつぶれて、なんとも言えないやわらかい感触を伝えてきます。気をつけないと一氣に持っていかれそうです。

何時間にも何秒にも感じられる時間が経ち、離れた百代の口と私の口が銀の糸で繋がっていた。心なしかうれしそうな百代はハッキリと言い放ちました。

「私は夏男が好きだ。冴子には先を越されたが負けるつもりは無いからな。覚悟しておけ」

それはいいのですが、いい加減畳に縫い付けられた傷からの出血が笑えなくなってきた。意識が朦朧として来ました。そして襲ってくる壮絶な眠気。私。寝て、いいよね。

鴉羽様は傷を塞げても失った血はどうしようもなかったようで、大量出血で死に掛けました夏男です。

事後報告で聞かされました。あの子の私。

眠ったというよりも気を失った私は緊急で医務室に運ばれて、何故か居るカエル顔の外科医に傷の縫合をしてもらいました。そこで失った血をどうするかという話になりましたが、輸血しようにもほぼセキレイの私に適合する血液はまず無いのでどうしようもありません。もっとも縫合の時には傷も半分ほどふさがっていたし、ほぼセキレイである私は人と比べて血液が作られるのが早いのでそれほどのものであってもありませんし、結局アレから2時間もしたら普通に眼が覚めました。ちなみに今私は緑色の患者服みたいなを着ています。

眼が覚めた私が最初に見たのは冴子と百代の顔でした。今にも泣きそうな顔の百代と問題がなさそうな私を見て安堵の表所を浮かべる冴子。半泣きでやりすぎたと私に謝っている百代の頭を撫でながら大丈夫だといって泣き止せました。それを見た冴子はムツとして宣言布告(?)をした。

「ふん、夏男はやらないぞ」

「私も負けるつもりは無い」

そんな事を言うてにらみ合う二人。そして突然乱暴に開かれる扉。

「出し抜かれました!!」

「うらやましいで候!!」

医務室に勢いよく入ってきた由紀江ちゃんと弓子、懲罰部隊服。お二人ともずるいです!とか私も夏男君が好きですとかこんなに大声を出した由紀江ちゃんは初めて見るし、弓子にいたっては乙女モ―

ドに突入。医務室は一気にカオスになりました。

その後いろいろあった末に由紀江ちゃんと弓子に告白されて濃厚なディープキスをしました。

あれ？これってハーレム？

ちなみに会議の方はというと実力者と国家元首に付いて来た各先進国軍によって＜奴ら＞の殲滅が決まったらしく、私が眼をさました頃には殲滅がもうすでに始まっていました。

報告書を見るとガングロヤマンバの川神学園制服を着た女子（？）生徒がマスカラ片手に＜奴ら＞の目玉を脳に届く深さで潰していて大活躍をしたとの事。

そして殲滅に行きたいのに行かせてくれない懲罰部隊組。

まだダメです！休んでください！と由紀江ちゃんにベットに押し戻されるし、冴子には眼を放したら夏男は勝手に行くから確り見張らないとな、と言ってベットに入ってくるし、それを見た百代も抜け駆けはなしと言ったジャマイカ！とか怒鳴りながら入ってくるし、弓子と由紀江ちゃんもそれらを見て不潔です！とか叫ぶし、おとなしく寝ていようと思っても寝れない始末。

そんな乱痴気騒ぎもカエル顔の外科医が来るまで続いてました。

そのカエル顔の外科医には肉体的には問題ないが、一応3日は休んでいなさいといわれました。

え？私の異常な回復力を見てどう思ったか？百代の超回復をいつも

見ているのでそれくらいでは全然驚かないとの事。

そして今は与えられた川神院の部屋で布団の中で一人する事もなく  
暇をもてあましています。

あー暇です。

でも明後日まで寝てないとまた医務室での乱痴気騒ぎが起くるので、  
おとなしく寝るとしますか。

ではお休みです。

## フラグ回収と反撃開始（後書き）

今回はフラグ回収回でした。

懲罰部隊組のフラグを一気に回収しました。本来ならもうちょっと後でも良かったけど、まあいいかと全部回収しました。

そして何故か会議に居た羽黒黒子。マスカラ片手に父から教わったプロレス技で無双してます。主に夏男君と百代のキスシーンで溜まったストレスの発散とか。

本来ならシリアスな会議風景にしたかったのですが、書いている途中にこのメンバーでシリアスはありえないだろと思ったので変えました。

ちなみにヒュームとクラウディオは板垣家の長男と長女に絡まれていて、ルーは釈迦堂と戦ってました。板垣家次女は安定のお昼寝中。三女はお留守番。

そして次回の夏男君は山を更地に……

## 生まれの秘密と約束（前書き）

クオリティ低くてごめんなさいm（―――）m

深刻なネタ不足に陥ってしまつて。まったく筆が進みません。

すらすら書けてた8話までが懐かしい（´・`・´・`・´）

## 生まれの秘密と約束

私は神だ。別に頭がおかしいとかではなく、確かに神と呼ばれている、それだけだ。

何処かの宗教団体に『唯一の全能神』やら『大いなる父』とも呼ばれているが、そもそも私は観測者だ。通常私の存在は知られるということは無い。それこそ何らかの不確定な要因が無い限り。

小説を読んでも登場人物は読者のことを知る訳が無い。それと同じ事。

ならば何故知られているのかというと、それは私が昔世界の調整役として転生させたやつが私のことを広めたからだ。たしかキリストとか言っていたな。

もつとも当時の人間にとって私は神に見えたのだろうな。

ん？なんだ？観測者である私が何故そんなことができるのか？

観測者である私はそれと同時に崇拜の象徴たる神でもあるのだ。その影響も当然受ける。そしてそれらである以前に観測している世界はすべて私が創り出したモノ。元より私には世界に干渉する権限くらいはある。でなければ転生なんて真似は元より出きるはずがない。

まあいい。そんなことより先ほど送った男はてつきり能力系を選ぶかと思っていたが、まさか物理系を選ぶとはな、面白い。

確かに私が送った時代的に能力系では少々説明に困るから物理系を選んだのはある意味では正解なのかもしれないが、どのみち物理系でも簡単に物理法則を無視したことができるから大して変わりは無いのだがな。

だが私もそこまで鬼ではない。少し無理はあるが、一応の説明は付くようにしよう。そうだな、まずは磐船を8隻ほどおろして、あと彼の選んだものが残るようにしよう。

ふむ、しかしどうもこれが蠱毒こじくのように思えて仕方が無いのは気のせいか。

まあ、それもどうでもいいことだ。

それよりも彼に約束したことだが、さすがの私もたいしたことは出来ない。これからの彼女が生きようが死のうがどうなろうとも私には手が出せないのだ。

歯がゆいとは思わなくも無いが、しかし何も出来ないのだからこのまま見守るしかない。彼女が生きているのかそれとも死ぬのか、それも彼の存在の大きさによるところだな。

??? side

ああ、何で、何で電車事故が、何で先頭車両だけ、何で、何で、何で。



ねえ、私を残してどこに行くの？

いやだよ、あなたの居ない人生なんて。

約束したでしょ？

ずっと一緒だって言ってたのに、何で私を置いていくの？

ねえ、私も連れて行って。

あなたの居ない人生なんて嫌よ。

嫌、嫌ッ！

どこに行くの？

私を置いてかないでッ！！

待って、今行くから置いてかないでッ！！

今、行くから

??? side end

ふむ、やはりこう来たか。まあ、半ばこうなるだろうとは分かって

いたが、さてどうすればいい、約束もあるしな。

仕方ない。呼ぶか

「　　やあ、始めまして、だな」

「　……だ、れ？」

ふむ、これは予想以上に重症だな。それほどに存在が大きいか、まったく愛されているな。

これなら問題ない、か。だが一応聞いてみるか。

「誰でもないさ、それよりもここに来たということは何か強い願望があるはずだが？」

嘘も方便という。すまないがここは騙されてもらおう。

「じ、こは……どっ？」

「ん？ここか？ここはどこでもないさ、ただ今ここで私と会っているということは何か叶えたい望みがあるはずだ、言ってごらん」

「望み……」

「そうだ、君の中にあるはずだろ？強い願望が」

「強い、願望」

「そうだ、それを私に言ってみるのだ」

「……ずっと、一緒に　　居る」

「そうか」

聞かなくても良かったが、それでも一応彼女の意思を聞かなければ  
な、そういう約束でもあるからな、これで心置きなくなった。

しかし、一つ困ったことがおきたな。彼は力の関係で肉体そのもの  
を作り直したからいいが、彼女はそうは行かないから肉体が無い。

別に肉体が無いことがそんなに深刻というわけでもない。魂をその  
まま輪廻に回せばいい。ただ、それでは記憶がなくなってしまう。

彼に近い存在として生まれることはこちらから都合をつけること  
ができるが、記憶が無いと必ずしも彼と供に在るとは限らなくなる  
から、それでは約束を違えることになってしまう。さてどうしたもの  
か。

「ねえ、本当にまた一緒にいれるの？ねえ、答えてよ」

見た限りでは思いは相当強い、これはおそらく輪廻を通して問題  
ないと思うが、如何せん確証がない。

「ねえ、つてば、ちょっと聞いてるの！？」

少々不安があるが、まあこの状態なら大丈夫か。

「ああ、出来る」

「本当!？」

「ああ」

また彼に会えると分かった瞬間にこの笑顔か、これは記憶のことは教えない方がいいのかもしれないな。

「また、会える。うん、また」

「輪廻を回つてもう一度最初から人生をやり直すことになるが、彼とは近い存在に生まれるよう此方で都合をしよう」

「ずっと、一緒、また」

聞いてないな。まあ、いい、送るか。

「月並みの事しか言えないが、お幸せに」

「また、また!」

さて、これで半分は約束を果たしたことはになるが、後半分は正直運に頼るしかないな。

まあ、いい。賽は投げられた。なるようにはなるだろう。

最大限の補助はしたからな。

??? side

ああ、私は今幸せを教授している。先天的要因によって妊娠をして  
もかなりの難産になるといわれていて、最悪子供と母体のどちらか  
を見捨てなければならぬとも言われたが、先ほど主治医から出産  
が終わって、子供、母体共々無事だと教えられた。

そして今我が子をこの手に抱いているが、妻に良く似た可愛い女の  
子だ。目元なんかもう妻にそっくりだ。

ああ、そうだ。名前は前から決まっている。

この子の名前は冴子だ。

我が毒島家に生まれてきた最初の子。

毒島冴子だ。

??? side end

## 生まれの秘密と約束（後書き）

前世の彼女救済回でした。

自分で書いておいて神は約束したけど、ろくに干渉もできないのにどうやって幸せにするのかがずっと疑問でした。

その割りには結構干渉してる気がしないでもないが。

彼女の中での彼の存在はかなり大きく、もはや依存している状態だったため、彼を失った彼女はその後すぐに彼を追う形で自害をし、そしてそれを見ていた神は彼との約束もあって彼女を転生させようとしませんが、彼女の場合は彼とは事情が違うので輪廻を通してでの転生をするしかなく、そうする場合記憶が消えてしまうが、彼女の彼に対する思いを直に見た神はおそらく大丈夫だろうと彼女を彼に近い存在に転生させます。

そして転生した結果……

2011/8/21 誤字修正

**理不尽な暴力と本領発揮（前書き）**

1ヶ月も大変長らくお待たせしました。

## 理不尽な暴力と本領発揮

交ざり気のない群青色の澄んだ空の下、気温の変化から発生した霧に包まれた早朝の川神院の境内にて黒いサイハイブーツに黒地の袖に、白いラインがある裾が短い振袖を着ていて、その上に灰色の羽織を肩に引っ掛けた、まさに黒を表すような姿をしている目の細い男と、上下を緑色のジャージで固め、黄色のいたって普通に市販されているスニーカーを履いた中国風の、こちらも細目の男が川神院境内に敷き詰められた砂利を踏みしめる独特の音を発しながら真ん中にある本殿はさんで西側の端にある道場を目指して歩いていった。

「いまはどういう状況だ」

黒い男      鴉羽夏男は問う。

「最初は目覚しい戦果を見せたけど、それだけで、後はこれといった成果は出てないネ」

たいしてそれに返すのは上下緑ジャージを着た細目の男。名前はルー・イー。この川神院に昔から伝わる川神流武術の師範代である。

「で、各国元首についてきた軍はどうした？集めれば最低でも大隊程度の数はあるはずだが？」

ここでの鴉羽が言う軍とは突如世界で同時発生した原因不明のゾンビ化した人間により、この川神市に避難してきた国家元首と供について来た特務部隊のことである。



「それが貴重な弾薬を温存しておきたいと言って動かないネ」

鴉羽はその軍の行動についてルーに聞くが、ルーから帰ってくる返事は芳しくないものだった。そもそも何故鴉羽がルーに聞いているのかというと、それはただ単に3日ほど前にこれから向かう道場で開かれた川神防衛会議にて発生したハプニングにより、怪我を負い、その療養で会議の翌日に行われたく奴らへの討伐に参加できず、3日経った本日に担当医から許可が出た所で、それにルーが同伴する形で防衛本部となった川神院の道場に向かつてる所である。

「……………なるほどな、高みの見物ってか。目出度いね。未だに自分達のが立場が上だとも思ってるんだろ。なあ、ルー？」

最初から期待していなかった鴉羽だが、まさかここまで事態収束後の下心が見え透いた酷い言い訳をしてくとは思わなかったらしく、呆れた口調で心のうちを告げる。

「もう少しオブラートに包んだ言い方をするネ」

同意を求められたルーは一応鴉羽のあまりに直接過ぎる批判を諫める。

「まあいいさ、元からやつらをあてにはしてない。それに自惚れていいるというわけではないが、600程度など十分補うことが出来る」

その後鴉羽は何も言うことはなく、二人に妙な沈黙が下りたまま道場にたどり着いた。

## 夏男 side

フフフ、今日であれから3日。ついに本気で暴れられるようになった鴉羽夏男です。今から楽しみで楽しみで仕方が無いです。

いやあ、今ルー師範代と一緒にいつの間にか川神市防衛本部と化した川神院の道場に向かっております。その途中でとりあえず今の戦況を聞いてみたんですけど、どうやらあんまり進んでないらしく、依然厳しい状態であることに代わりはないと言っていました。

まあ、川神市も大きいですからね、いくら質が高かろうとも1000と900と20ちよつとでうん十万も、うん百万もあるく奴ら>を相手取るのはさすがに厳しいようです。というよりも、これほど数に差があるのにそれでも防衛ラインを築けている時点で異常です。相手の総数は観光客や不法滞在者も入れて最低でも1億3千万人を考慮すると部が悪い所の話じゃありませんね。

もっともそんな数など関係ないという存在も居るには居るのだが、高齢のご老体だったり、怪我で3日ほど寝込んだりと不幸が重なって結局厳しい戦況を強いられているというのが現状ということですよ。

各国元首についてきた軍の奴らも集めれば一個大隊くらいはあるから結構な戦力にはなるんですけど、こっちは端っから期待してません。練度も低いし動きもとろい、戦場に居られるとはつきり言って邪魔です。それに先ほどの返答を聞く限り、彼らは未だに自己の利益を最優先で悠長に責任の在り処という不毛な言い争いをしているらしいですし。

此方が1920程度なのに対し、相手側は最低でも1億3千万。その差が実に約67708倍もある現状では600とはいえ、その戦力はなくてはならないものである。と向こうは考えているが、実際は有ればそれに越したことはない。しかし、どうしても欲しいかといわれれば、そうともいえないという果てなく微妙なもの。

現代では戦略兵器などという、一発のミサイルで戦争を終わらせられることから忘れられがちだが、通常戦いというのは、相手より多くの数をそろえたほうが有利であるというのは定石である。そう考えれば彼我の差が実に6万8千倍もある今は戦いにもならないのは火を見るより明らかなのだが、その理論にはいくつかの前提が必要である。

相手とこちら側の『数』以外の条件がほぼ同じであること。

相手に理性があり、考えることができること。

そして、何よりも相手が生きていること。

およそこの三つの前提がなければ成り立たないのだ。今回はこちらは武器があつて、向こうは生身のしかも動きが遅い、数だけの集団そしてく奴ら>になった人間は生物学上、生きては居ない死んだ状態である。当然死んでいるのだから理性はなく、考えることは出来ない。ただ音のする所に向かって移動し、音を発する生物を喰らう。それだけ。

1億3千万と1920。数にすればはつきり言って自殺行為だが、この1920という数はそれこそ一人一人が人間とは思えないほどの『力』を持つ、いわば化物集団なのだ。1億は無理ともこの町に

集まる数百万程度ならば少々厳しいが、滅ぼせないことはないのだ、何よりもここには人外が2人に人をやめかけてる人が10何人いるのだから。

だからこそ各国首脳の思うほどに、自分達の存在は重要ではない。このような事態が起こった今、国という後ろ盾は意味を成さない。だからこの川神市で何をやろうとも自由だが、あまりにも鬱陶しければいつでも切ることができる。所詮はその程度でしかない。

目立った動きはないが、水面下では此方の動向を嗅ぎまわっていることは全て分かっている。別にそれで此方を何とかできるわけではないが、鬱陶しくはあるから少し脅しをかけておくか。

それにたぶん『彼ら』も見ているだろうから、今日は少し頑張ってみよう。

ちなみにフランス中將の部隊はエーベルバッハ少尉を始め、全体の戦闘力が非常に高い集団でもあるからということで、この川神市周辺のく奴らへの討伐には欠かせない一角でもある。

夏男 s i d e   e n d

川神院の宿舎に泊めてもらっている今、本来なら見張りをする必要はないが、先日言われたことが頭から離ず、夜も眠れないからベランダに出て冷たい空気に当たる小室とそれについてきた形の平野はやることもなく双眼鏡やスコープで周りを見ていて、そろそろ7時

になろうかというときにそれは起きた。

突然川神市の北西のほうから突風が吹き荒んだかと思ったらドオオオオオンッ！という凄まじい爆発音がして、その爆発音と連動するかのように地鳴りがした直後にガタガタガタ、と地面が上下に細かくゆれ、しばらくすると前後左右にゆるく円を書くようにゆれ始めた。

「じ、地震？」

「……お、おい見るよ、小室」

ちょうど先ほどの突風が起きた方角をスコープで見ていた平野は先ほどの地震で小室がベランダの床に落とした双眼鏡を拾って小室に自分が見た方角を見るように促した。

「嘘……だ、ろ……」

「今の音は何！！」

今しがたの轟音と地震でベランダに飛んで来た高城は何事かとベランダにいた二人に声を荒げながら聞く。

「や、山が……」

「あ、あれは鴉羽先輩ッ！」

「ちょっと貸しなさいよ小室！」

そこで高城が双眼鏡越しに見たものは、山崩れでも起したかのよう

にごつそりと削り取られた山とそれに巻き込まれて生き埋めになっ  
ているく奴ら>と運よく生き埋めにならなかったく奴ら>を百代や  
冴子と一緒に鬼神の如く切り倒している鴉羽の姿だった。

理不尽な暴力と本領発揮（後書き）

これから暴れていきます夏男君です。

各国首相は全ての騒ぎが終わった後に失った自分の地位の確保のために責任の在り処の追及を川神か鴉羽に押し付けるつもりです。

そして今回は夏男君がお前らこれ以上調子にのってつと弔詞を送ってやつぞ的な牽制をする意味で山を半分ほどバターのようにつり取りました。前からやるやるとも言ってますしね。

番外編：もし夏男くんがセキレイではなく超能力者だったら（前書き）

今話は少々鬱成分が含まれております。苦手な人は閲覧にご注意下さい。



番外編：もし夏男くんがセキレイではなく超能力者だったら

私は異常だ。物心の付いたところから私の周りではよくおかしいことが起きたりする。

それはテレビが突然付いたり、消えたり、夏場に暑いなと思った瞬間にクーラが勝手に付いたり、友達とかくれんぼをしている時に柱の向こう側に友達は居ないかなと思った瞬間に柱が消えて隠れている友達が見えたり、砂場で遊んだ時に友達がふざけて作った膝まで位ある深さの落とし穴に嵌って砂場に転げたのにまったく体に砂が付かなかつたり、海に行つて溺れた時も苦しいはずなのに何故か呼吸できたりと気付いたら私の周りには不思議が溢れていた。

幼稚園の時は友達も珍しがって、羨ましがられていた。それもそうだが、幼稚園児にとっての日々は今日この子とこれして遊んだ。じゃあ、明日はあのことああして遊ぼう。何も縛られずに気の向くまま、風の向くままに友達と遊ぶ幼稚園児にとって僕の身の回りに起こる不思議はただただ便利に見えたのだろう。

しかし、それも年がたつことに変わってしまった。

今までの友達と一緒に別の場所から来た知らない人たちもいる小学校。今までの付き合いがある友達は見慣れているから大して何も思わないが、しかし、それがまったく別の　それこそ他の地域から来る同年代の子供達や新しい先生はどう思うのか。

最初こそ何も知らない、私を普通に、一般と同じだと思っていた彼

らは私の不思議を知った当初は戸惑い、そして気味悪がり、嫌悪し、最後は迫害。

人というのは自分達とは違う別の何かに対して非常に敏感であり、また酷く嫌う。

始まりは小さい、本当に小さな意地悪だった。クラスメイトの一人が休み時間の時に私の教科書を私の隣の人の机の中にかくしたのだ。休み時間友達と一緒に校庭でボールで遊んでいた私は帰ってきた時に机の中に入れていたはずの教科書がないことに疑問を覚えて、机にしまい忘れたのかと思って鞆を見てみるとその中に新品同様の教科書があった。

今から思えばわたしはこの時から無自覚に『能力』を使っていたのだろう。

私の教科書を隠したクラスメイトは当然そのシーンを見ており、教科書が二つあったのかと悔しがり、その次の授業では鞆の中身も確認して今度こそはとまた隠すのだが、結局また鞆の中から新品同様の教科書が出てきた。その後も何回も何回も似たような手口で物を隠すも、どこからか隠されたものの新品同様に綺麗なものが出てくるのだ。

それをおかしく思った友達はやがて気味悪く思うようになり、それが周りに伝染し、さらには幼稚園の時から友達でさえ気持ち悪く思うようになって、やがて私は孤立して行った。

気がついたら私は一人だった。

皆から気味悪がられ、まるで腫れ物のように扱われ、あまつさえ親にまで忌避されるようになった。

小学校も5年に上がった時の夏だろうか、その時学校では完全に孤立していた私は当然友人と遊ぶなんてことはなく、学校終わりと供に家路に着いた。

そして家に帰ったとき私が見たのは何もない、家具も、カーテンも、クーラすら付いてなかった文字通りのもの抜けからになっていた。

そんな何もない家に手紙が一通だけポツリとおいてあった。

君のその力はあまりにも気持ち悪い。私達夫婦は今まで耐えてきたが、もう我慢できない。君をこんな形で棄ててしまうことは非常に心苦しいが、私達にはもう君を育てることは出来ない。だから私達夫婦は出て行く。

要約するところ書かれていた。

要は実の親にさえ棄てられ、拒絶されてしまったのだ。

棄てたといっても、それでもほんの僅かでも親心が残っていたのか事前に僕の保護先を施設に依頼していた。親権の放棄も何もかもの法的手続きを済ませていたようで、その日の夜に來た施設の役員に私は連れて行かれた。こうして私は施設に入った。

施設に入って少し、私は自分の身の回りの不思議が『能力』であることを十分自覚できるようになっていし、この『能力』の制御の仕方本質も何もかも全て分かった。

だから施設では『能力』のことは知られることなく、少し変わった子という印象を持たせることが出来た。  
そこで私はやっと初めて普通の日常、友人に囲まれた日常というものをすることが出来た。

この日常の大切さを一度失ったことがあることで分かる、非常に危ういものであると。私を棄てた親については今更どうこうしてほしいとも思わないし、したいとも思わない。むしろ感謝している。

そう、私は今、昔私を棄てた親に感謝している。

なぜなら私はこの『能力<sup>ちから</sup>』で最愛の人の心を守ることができる

あれは施設に入って、近くの中学に入ったときのこと。

入学式で偶然見つけた一人の少女。少女というにはあまりにも大人びた姿でいて、美しい姿だった。

一瞬、ほんの一瞬ではあったが、グラウンドに張り出されたクラス分けの看板を見に行った時に目が合ったのだ。そんな彼女を一目見た瞬間に私は全身に電撃が走ったような衝撃に襲われた。その瞬間に分かった。私は彼女に惚れたと、一目ぼれだと。

混ざり合う視線は本来なら、一瞬の出来ことだったが、その一瞬が何秒にも、何十秒にも、何分にも感じられた。

刹那の視線の絡み合いが終わった時、気が付いたら彼女はいなくな

っていた。

私はまるで何かに取り付かれたかのように看板を見て彼女の名前を確認しようとしたが、看板の前まで来て、そういえば彼女の名前を知らなかったと思い出して酷く落ち込みました。

結局その後も彼女のことを頭から離れなかったが、何時までもグラウンドに居ても埒が明かないので、私は看板に自分の名前が書いてあった教室に向かった。

そこで見たのは先ほどの彼女。何処か近づきたい雰囲気を放っている彼女に私は少し気おされたが、ちょうど席も隣だったらしく、私は自分がこれから１年間使うことになる予定の席に向かい、気を取り直して彼女に名前を尋ねてみた。

私が声をかけると、彼女はその長い青み掛かった美しい黒髪を揺らしながら振り向いた。

彼女に名前を尋ねると、彼女はこう言った      毒島冴子と。

今私の目の前には木刀片手に泣きじゃくる毒島さんと地面に倒れこむ血まみれのサラリーマンらしき中年男性。

「楽しかったのだ。明確な敵が得られたこと、それは悦楽そのものだった。木刀を手にした私は圧倒的優位にいると知って怯えたフリをして、男の動きを誘い、ためらうことなく逆襲したッ！！

楽しかった、

本当に楽しくてたまらなかったッ！！

それが、真実の私

、

毒島冴子の本質なのだッ！！

ただ力の酔いしれ、楽しんでいた私が少女そのものの真心を抱くなど許さ」

「もういい。もう、いいんだ」

ああ、彼女は今自ら罪悪感につぶれかけている。これ以上放っておけば彼女の心は間違いなく壊れる。

そんなことはさせない。私がさせない。こんな私でも、こんな私でも一人の少女の心くらいは守って見せてやる。

また親に棄てられたように、彼女にも棄てられるかもしれない。でもそれでいい。一人の少女の心を守るのなら、私はどれだけ傷つくこともかまわない。それが『かのじょ人』を好きになっしまった『わたし化物』のせめてもの願い。

だから今、心優しい彼女に私の全てを話そう、たとえまた棄てられても彼女を救えたという事実だけで私はなんとか生きていける。だから話そう。

「何g」見てくれ」……………それ、は」

「うん、これが本当の私。昔から私だけにあつた『能力』、本物の化物だ」

私は自らの『能力』を全力で開放した。開放された『能力』を象徴するかのよう背中に三対六枚の白い翼が現れる。

施設に入ったすぐにこの『能力』の本質を理解した時に現れた翼。

背中からとてつもない、目に見えない圧力を放っている三枚六対の翼が現れると同時に周囲の空間が一変する。

その空気に飲み込まれたかのように冴子は目を丸く見開き、口もポカンと開きっぱなしだった。

「このように私の『能力』はこの程度のアスファルトやこの周辺にある建物をいとも簡単に破壊することができる。それこそ砂場の砂で作った城を壊すような気軽さだね。こんな『能力』を持つて私のほうがよほど化物だろ？それに知ってるか？私の、ち、からは…  
…軍隊ですら簡単に、ね、ねじ、ねじ伏せることが、で、きる、んだ」

何で？何でだ？彼女を救うためならば、たとえどれだけ嫌われようとも、蔑まれようとも、拒絶されようと覚悟は出来てはすなのに、何で、何で涙が止まらないんだ、どうして、こつも嫌われるのが怖いんだ、どうして、どうして、

どうして　こつも胸が痛むのだ。  
。

「だから、君は、私と違って化けm「もういいッ！！　これ以上言うなッ！！　……もう、分かったから、もう」

話してる途中で彼女に逆に抱きしめられ、逆に止められた私はそのまま彼女は抱き合って泣き続けた。鳴き続けた。

初めて受け入れてもらえた。そう思うだけで何故か心のおくが物凄く暖かくなって、涙が止まらなかった。

その後、全てをさらけ出して、初めて受け入れてもらえた私はより毒島さんのことが気になっていた。朝も昼も夜も、飯を食べる時も寝る時も、いつも毒島さんのことがより頭から離れなくなって、気が付いたらいつの間にか恋人になっていた。

そして世界が壊れた今。何もかもが昨日とは、先とは違う今のこの世界、この世界で私は最愛の彼女を守るために親から貰ったこの『能力<sup>ちから</sup>』を振るおう。この『未元物質』を。



番外編：もし夏男くんがセキレイではなく超能力者だったら（後書き）

番外編のもしもシリーズ第2弾のダークマターでしたww

いや実は私、ダークマターは戦闘において一級品なのはもちろんと  
して、日常においては下手したら貨幣という概念が要らないほど便  
利だと思っんですよねww

ちなみに今話の夏男くんはダークマターと演算能力をもらった代わ  
りに記憶を失いました。という設定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7471u/>

---

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD-黒い鶺鴒-

2011年10月2日11時37分発行